始

ベーデン・パウエル卿著
少年團日本聯盟譯

青年健兒教範

少年團日本聯盟需品部發行

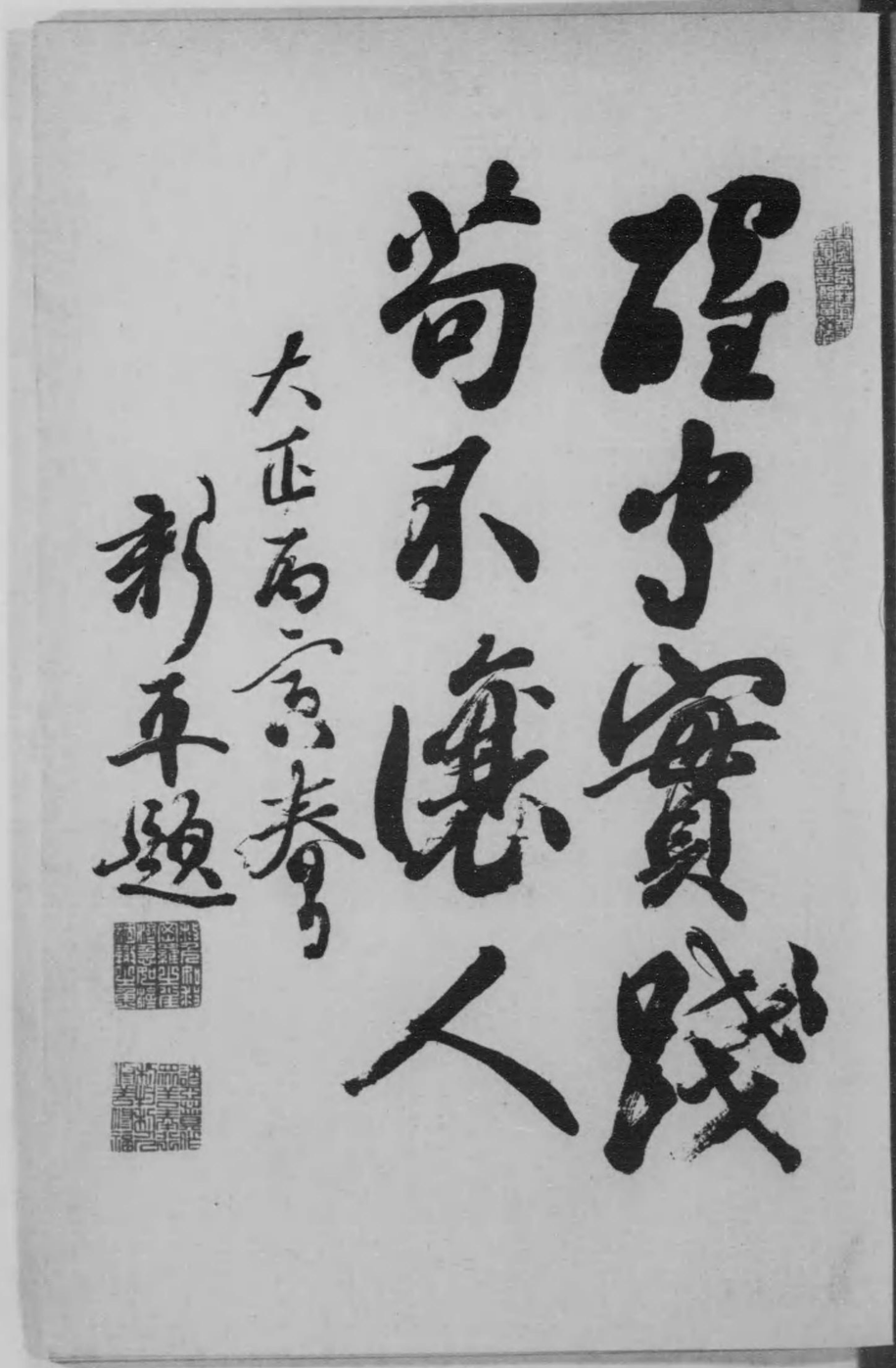
大正
15. 10. 5
内交

本書は、本聯盟主事奥寺龍渓をして、譯述せしめたるものにして、苟も後藤總長の古稀の祝賀に際して、本書を呈することを欣幸とする。

大正十五年六月四日

少年團日本聯盟

ベーデン,パウエル卿


理學實踐
苟不塞人
大正丙寅春
彩平題

279.5-58

野營の朝

（序詩）

二荒芳德

ふと眼が覺めた。
明け白らんで來たのか、
それとも月が出たのであらうか。
夜露に濕つた天幕は
薄く色づいて來た。

昨日のハイキングで
疲勞したからだは
夢さへ見ぬ快き眠りを
今まで續けたのであつた。

草を藉いた寢床の
その綠葉の匂ひが、
「一人天幕」の中に薫つてゐる、
大きなのびをして
香のよい銘茶を味ふやうな、
豐かな、靜かな心地になつて
綠の香を
一つ、二つ、三つ、四つ、
深く深く吸うて見た。

又、手を伸べて天幕の
支柱を固く、固く握つて見た。
體中の力をどこかに
出して見たくなつたので……。

譯者の言葉

ベーデン・パウエル卿の Rovering to Success は 英國の忠誠なる古老として、その體驗せる處を以つて、彼の忠告を、次代の青年に引き繼がんとするものである。その述ぶる處は、天地、國王、父母、社會に奉仕して、神意の實現に力め、以つて、幸福の彼岸に達し、これが成功を期するために、彼等の傳統の特色たる自治の精神を以つてせんとするもののやうである。

この書を讀めば、丁度原著者と同年齢の後藤總長が、我國少年團運動のために、自治を力說して、東奔西走して居られる奉公の熱誠と同樣であることを感ずる。蓋し、自治は、人類の社會的生活の本能に發して、各自の努力精進と、無我の奉仕團結とに、國民生活の健全なる發達をなすものである。然るに、我國にては、自治制採用以來、自治の

昨夕、
山清水の氷のやうな、冷さに
汗と垢とをながして後、
あの山ふところの
篝火の團居に興じた、我々の姿を。
樂しくも思ひ出して見る。
『自然の神の懷に溫くも我等は
抱かれてゐるのだ。
大空に輝く星がキラキラ囁くのは
きづと神よりの信號だらう。
あのリスミカルな明滅は
それに違ひない』
團居を解いて
我が臥床に歸つて來た。
枕に頭をつけて、もの〻三四分、
現と夢との間を僅に距てたのは
天幕に落ちかゝる、松の滴がたまに、
ポタリ、ポタリ、と云ふ音であつた。
月ではなかつた。明け初めたのであつた。
天幕の色は今や紅に染め出された。
さあ、起きるのだ。
今日もまた、兄弟と
自由の天地にかけり遊ぶのだ。
自然の神の護ゆたかに受けながら、
胸に「いやさか」の信しかと秘めて……
今や我等は朝日を拜まんと
冷かな砂を跣足で踏んで
天幕の外に勇しく出るのだ。

（大正十五年五月）

教育を解せず、思向の融合を缺き、未だその訓練を見るに至らなかつたのである。

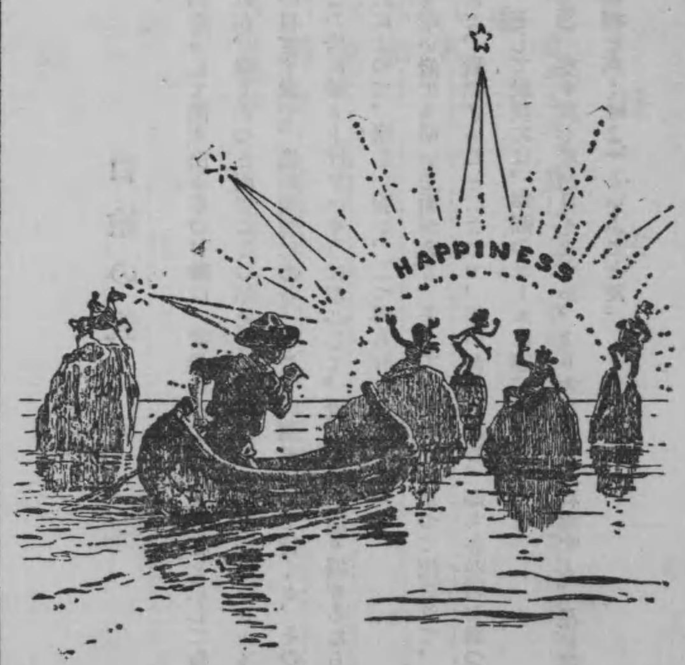
スカウト訓練法は、英國が現代に貢獻した新教育法として認めらるゝに至つた。この教育法によつて、各國は、各その國民の傳統的信仰に立脚し、神ながらの國民性を發揮し、現代生活の缺陷を補ひ、以つて、人類の共存共榮に資せんとする理想を有するものである。

この書を譯述するのは、我國少年團の創成に當つて、彼我國情の相違を辨へ、その長短を明察し、新に我國に適する訓練法を生まんがために、その根據の一つを加へ、自治の公民資質を了解して、新興帝國青年の奮起を切望するからである。

譯者の微力、原著者の意を汲み得ざる處あらば、讀者の叱正を得て、訂正の責に當りたいと思ふ。

大正十五年六月

奥寺龍渓



自分の舟漕ぎ。

この繪はこの書の指針である。

口繪の説明

成功をさして漕ぎ出るこの口繪は、當然警戒すべき大岩礁を示してゐる。

それが、暗くぬつと出てゐるのが見える。併し明い部分のあることも忘れてはならぬ。それが諸君の目ざす處で、遙か向側にある。そこで向側に廻つて行くと、その明い側もあるのだ。

唯この岩に乘り上げないやうに用心して、賢く其處を通り過ぎるなら、それが見付けられる。これによつて、樂しい物が、二つ得られるといふのだ。

最も暗い岩にも明い方面があり、そして、受け身になつて流されて、破滅せずに、自分の成功を求めて、發動することによつて、報いが得られる。即ち各の岩を廻つて行く時に『人格』が得られ、そして最後には、幸福のゴールに達する。

（注意）空中高く星が見えますか。より大なる力を利用せよ。星を道しるべにせよ。換言すれば『目標を高くせよ』といふことだ。

目次

緒言、富めるも、貧しきも、幸福を得られる方法……一

暗礁

一、馬……三七

二、酒……九九

三、女……一六五

四、郭公……二三九

五、無宗教……三〇七

總括……三五八

遍路……三六一

緒言

これは、この書の述べんとする輪廓と、「成功」とは何かを説く。

富めるも、貧しきも、幸福を得る方法。

舟乘りは、生涯の航海のやうだ。

古老は水先案内の注意に手傳ひすべき筈だ。

唯一眞正の成功は幸福である。

幸福への二階段は、生活を競技と思ふことゝ、慈悲を施すことだ。

ビルマ人は、幸福な人民の一例である。

幸福は只の快樂でもなければ、富裕の産物でもない。

それは受動的享樂に非ずして、發動的努力の結果である。

汝の成功は、生涯の航海に於ける汝自身一個の努力にある。

而して危險の暗礁を避けることだ。

學校にて學べる處につぐに、自己教育は必要である。

確信を以つて前進せよ。

汝自身の舟を漕げ。

先人のこの問題に對し述べたるもの。

歌。

参考書。

富めるも貧しきも幸福を得る方法

この緒言は、この書の目的を説明する。

生涯の航海

私が嘗つて、樺皮製の小舟に乘つて、アッパー・カナダの湖水に漕ぎ出た時に、强風に遭つたことがあつた。風が吹き續いてゐる間は、かなり氣を揉んだが、よい經驗であつた。

私共は、時には滑かな處に出で、時には急流を通つて、河川を漕いで行つたのであるが、常に變化ある。森林の偉觀の間に居つたのである。

流れを通つて、廣い湖に出たり、又日當りのよい處に出た後に、急に風が起り、浪跳る湖水に出で、黑雲に包まれたりすると、一種の經驗であつた。

川を渡る乘物位に見て居つた、か弱い小さな舟も、今は、全く命を托する唯一の望であつた。それが大波を浴びたり、暗礁(其邊には澤山ある)に當りでもすると、吾々は最後であつたのだ。

推進機とも思はれない我等の橈は、押し寄せる波を突いて進む唯一の手段であつた。萬事がその一の器具に取り縋るのみであつた。

『廣い灣を四時間走るのにも、多くの風波に遇ふ。その二時間も同樣ではない。正しく之に應じなかつたならば、一時間として、安樂なことがない。』とスチ"ワート・ホワイト氏が、その愉快なる『森林』といふ本に書いてゐる。そしてかゝる時に、如何に處するかを述べてゐる。

片舷を波が打越す時は、風下側に漕がなければならぬ。舟が波に乘つた時は、波の峯に、少しく舟先をまかせ、下りになつたら、方向を取り直す爲めに、橈を急に使はなければならぬ。この傾斜を漕ぐのには、身體もこれに相應した方面にひねらねばならぬ。波間に落ちた時は、二三度漕いで、少しの進路を確保する。二重波をば、巧妙にあすらひ、全體に波をかぶらぬやうにしなければならぬ。また横波をば、眞直に漕ぎ切らなければならぬ。これに應ずるには、全く身體の釣合次第である。身體を一方によせて波の角度に縋り、舟のふれるのを防がなければならぬ。

勿論危急の時は、波の峯が下になつた時である。打寄せる浪を破る場合には、橈の平面を、水中に深く入れて、轉覆を防ぎ、風下になつて、舟の側面と、舟底の半を、波の衝動にあてること

である。

兎に角回復を瞬時にしなければならぬ。一秒時でも長くより過ぎると轉覆する。』

實に昂奮する作業だ。

著者は續いて眞前から來る波、側又は眞後から來る波を、どうさばくかといふ事を。同樣な記事で詳說してゐる。

如何なる場合に於いても、注意の集中、勇氣、活敏次第である。少しく手遲れしても、沈沒だ。併しこの競合には代償がある。『多分何物も、こんなに體力、知力、神經の最後の纖維まで、緊張せしめるのに、もつと有効なものがあるまい。歡喜で一杯になる。緊張した筋肉は、直ちに、正確に最も輕微な刺戟にも應ずる。全身緊張した勢力で充たされる。最後の波浪が解決すると、心が其處に突進して來て、そして次の波浪に向つて、非常な熱力で躍動する。それは一種の心醉である。各波動を擬人し、敵手に對するが如く、之れと接戰し、打破つて勝を得たるが如く、風下に驅逐し去る。『やつて見ろ、貴樣』と叫ぶ。『ア、、やれよう、やれますか。出來る、出來ると思ひま

して盡を力全れ渡ぎ漕

すか。』その風浪咆哮の間に立つて、武者の身構して、立つたやうに、打ち流し、切り開き、少しでも、しきがあつたら、櫓を入れて、一漕ぎ二漕ぎと、歩武を進める用意をせよ。進む速さのみ考へて、あた波に忙殺されてはならぬ。目指す處に漕ぎつけるのに、遲いといふ事は、二三百碼に達するまでは何でもない。それから努力をゆるめてはならぬ。岸から數百碼の波と戰ふのは、四哩の處のと、危險は同じである。』

然り、多忙な人生も、丁度これと等しい。

この書の意圖

初期に平凡な流を漕いで、次に、廣い湖水に出で、雜儀も起れば、次々に注意して舟をあやつり、波をよけ、岩

をさけて、危險に打ち勝つ凱歌や、無事に安全な上陸地に滑り込み、嬉しい篝火の一夜を、疲れて眠に就くといふ全體が、丁度人生の行路と同樣である。併し、荒い波風に遭つて、困難や、誘惑に陷り、水浸しになることもある。是等は主に、起るべきことを警戒しなかつたり、又はその處理の方法を講じなかつた爲めである。

私はスチュワート・ホワイ氏の、航海上の經驗から得た、實際上の注意を二三引例にしたのである。私は、次に、人生の行路を渡るのに、起るらしく思はれる、別の岩角や風浪をさばいた、自分の經驗を二三述べたいと思ふ。

これ等の岩角の間に、昔からの語で符箋を打つた『馬、酒、女』があり、郭公や、カントも加はつてゐる。諸君は何時かは、その多くに、遭遇する運命を持つてゐる。是等の岩には、危險な點もあれば、善い點もあることを述べ、又如何にして、『遍路』によつて是等を避け得るのみならず、利益も得れば、成功も得られるかといふ方法を、次の章に述べたいと思ふ。

忠告の引續ぎ

人が生きてゐる間に、種を播いたり、成果を收めてゐながら、死ぬ時には、その得た智慧を皆持つて行つて了ふのは、常に私には不思議に思はれることである。

そして、その子息、兄弟に、又始めから、凡ての仕事を學んで、經驗を積ませなければならぬ。何故にその父兄は、自分の得た智慧を澤山に持つてゐて、善い出發を與へ、高い才能の方向に進むやうに、之を傳へることが出來ないのか。

かういふ考が、私の心の中にあるので、私の生涯にあつた困難の二三を述べ、如何なる方法で、之を處理したのが、一番よかつたかを記して見る考になつたのである。私が『どうこれを處理』したかを云ふのではない。時としては誤つた方法をとつたこともあり、後になつて、自分の誤りから、どうすべきであつたかを見付けたこともあるからだ。

そこで、この本は、經驗のある人に讀んで貰ふ考ではない。これをさけて、青年の爲めに之を書き、希望を抱いて前途を見る考のある者、如何なる方向に進まんかと思ふ者、生涯に何をなさうかと思ふ者の爲めである。そして新時代の青年は、過去に於ける先輩よりも、この方向には、もつと頭が揃つてゐる。今度の戰爭の教訓は、多くの青年をして、働き盛り前に、之を得させてゐる。

バレンタイン氏が、土人の『古老』といふ俗諺に述べてゐる青二才にならうといふ者があるまい。

『後に立つて、進まうとする馬鹿のまねをする者もある、

前に行く者は、何處に行くのか知つて居らぬ、

親の足跡を踏んで、子供が行く、

そして、親のしなかつた物は、決してしない事はない。』

私はこの本をば『成功への遍路』と呼んで置く。

最後の章に至つて、この語をとつた理由がもつと解るだらう。

遍路といつても、目的なしに、徘徊するといふのではない。確かな目的を以つて、愉快な途を見付け、途中で遭遇すると思はれる困難、危險を考に置いてすることである。

是等の多の暗礁をば豫期しなければならぬ。

私は自分で、世界の大部分を歩いて、辛いことは、いくらか嘗めてゐるし、人生の甘味も澤山嘗めてゐる。それだから、全く空想から是等の考を、諸君の前に述べるものと思ふには及ばぬ。

人生は砂糖ばかりではあきる。鹽ばかりで食べては辛い。併し料理の一部分として味ふ時には

食物に風味がある。困難は人生の鹽である。

ゲーテの母は、人生に對するよい戒を與へてゐる。

『私は荆を探さない。面白い處を少しとる。入口が低いなら屈む。途中に石があつて、取り除けられるなら、取り除ける。重い石なら廻つて通る。』

換言すれば、突き當つて、面倒を見ることはせず、物事の來るなりに、最善を盡すのである。それが成功に達する途である。

眞の成功は幸福である

成功は何か。

木の絶頂か。富貴か。位置か。權力か。

そんなことは少しもない。

こんな、又これに似た考は、自然に諸君の心に起るだらう。世間では一般に、これを成功として說教してゐる。そして又大抵他の者に優れて、何かに付けて勝つてゐるのを、見せびらかすや

うにとつてゐる。人に働かせて、何か利益を得るやうに思つてゐる。

私のいふ成功は、そんな考はない。

私の信ずる處では、この世の驚異、善美を、各の才能によつて鑑賞し、或場合には、之を增進せしめる爲に援助をして樂しみ、又は人に勝ることを求めずして、人を助け、こんな樣にして生を樂しむ。それが幸福である。

私が成功を幸福なりといふのはそれである。併し幸福は只の受け身ではない。座つて之を求めようとしても、これが得られない。それなら、小さい快樂である。

併し我々は手も、足も、頭も、抱負も與へられてゐる。それで活動するのだ。そして眞の幸福を得ようとすれば、受働にあらずして寧ろ發動である。

幸福の二訣

富者には制限がある。二三軒の家を持ち、室も澤山あらう。併し體が一つしかないから、代りに一室を用ゐるだけだ。

それでは貧乏人と選ぶ處がない。

日沒や、日光や、風景を眺めて、之を樂しむのに、富者も貧者も異る處がない。

若しも貧者にして、人生に於ける次の二事をなさんとする考があれば、百萬長者と等しく之を樂しむことが出來る。多分もつと樂しめる。

第一

物事を餘り生眞面目に考へ過ぎるな。併し、得た物には最善を盡し、人生を競技と思ひ、この世を競技場と見ること。併し、シャックルトン氏の云つた如く『人生は凡の競技中の最大なるものであるが、平凡な競技として之を取扱ふ危險がある。……終局の目的は、名譽を擔ひ、立派に之に勝利を得ることである。』

第二

諸君の活動、思想は、愛によつて導かれること。愛といつても、眞の愛であつて、戀愛などに陷るやうなことをいふのではない。他人に善行をなす時、親切、同情の表はれる時、親切を受けて、感謝の意を示す時の、親切の精神の働きである。それは善意である。

幸福な人民

私の知つてゐる國民として最も幸福な人民は、ビルマ人である。彼等の元氣なこと、快活なことは知れ渡つてゐる。動物に對する親切さは、彼等の最も大なる『弱點』である。ビルマ人は苦痛を除く爲めでさへ、動物を殺さない。彼は魚も食はない。そして大抵愛養物として、大切に動物を取り扱つてゐる。男も、女も、子供も、皆等しく愉快に、彼等の國の美を樂しんでゐる。その草花、その日光、その森林、歌ひ、笑ひ、そしてさざめいてゐる。彼等は、人が怠惰と稱するかも知れないほど、金錢の慾から全く離れてゐる。必要に充分なだけ金錢や、收獲を得て滿足してゐる。そして其他は、只に生を樂しむのみである。併しながら其樂しみは、全く怠惰な樂しみではない。どんな青年でも、或期間は僧庵生活の訓練を經てくる。どんなに暮しがよくても、その期間は、望んで一文なしの貧者になる。彼は嚴肅に僧庵に生活して、祈禱と、瞑想とに耽る。そして、宗教思想を、少年に教へてゐる。そして、入用な人には、最善を盡して、援助を與へる方法を學ぶ。かくの如くして、世間に出ると、彼は他人に奉仕の考を有つた人になり、善良なる公

民として、純眞な心の經驗を所有するやうになる。

この好意の注意すべき表現は、其國の途上で見られる。何處へ行つても、樹陰に水瓶が置いてあつて、行人の渴を醫することが出來るやうになつてゐる。そして、徒步者の爲めに、席を造り得る者によつて設けられてゐる。

ビルマ人の書いた『人民の精神』の野中の廣間にかういつてゐる、

『個人として、何處で成功しようと、失敗しようと、ビルマの國民は、常に世界で最偉大なるものであらう。……なぜなれば、最も幸福であるからである。』

幸　福

幸福は貧富によらず、誰れでも達し得られる。

それだのに、幸福な人は、比較的少ない。

それといふのは、多數の人は、之を握つても、之を認めない爲めであると私は信ずる。

メテル・リンクが書いた『青い鳥』を讀んだことがありますか。

ミルティルといふ少女と、その兄のティルティルが、『幸福の青い鳥』を探すに出かけたといふ話です。そして國中を探しても、探しても、少しも見付からんもんですから、遂には步き廻る必要がないといふことが解つた。『青い鳥の幸福』は、他人に善行をなすことによつて、自分の內でさへ、立ち處に得られるといふことであつた。

この話の眞の意味を考へるならば、月世界にあると思つてゐた幸福は、手のとゞく處にあるといふことを了解する手助けになる。

多くの者は、彼等の仕事を骨折りだと思ひ、仕事に日々かよふのでさへ億劫だと思つてゐる。そして何か眞の快樂でも得られるやうに、休暇を待ち續けてゐる。その休暇も屢々雨になつたり、雪になつたり、或はインフルエンザに罹つたり、折角の外出も霜と消えて了ふ。

實際の事は、幸福を將來に延す必要がない。その方法は只常住、生を樂しむことである。明日死ぬかも知れない。その時になつて、新鮮な空氣を吸つたり、靑葉を見たり、鳥の鳴く音を聞かうと思つても遲そ過ぎる。賢い人は、朧げな將來の、空漠な天國に預金をしない。彼は自分の爲めに、自分で天國を作り得ることを知つてゐる。この世界に、即刻出來る。已に得た物は、特に

障がないならば、一層進んで、二つ以上も收め得られるやうになる。

愉快は幸福でない

多くの人は『愉快』は『幸福』と同樣な物と思つてゐる。それが誤の分岐點だ。

愉快は煩悶の元たること餘りに多い。フット・ボールの競技、劇、又は面白い讀書、隣人の批評、過食、暴飲をして愉快に感ずるかも知れない。併しそれは、ほんの一時で、長くは續かない。實際の反應は面白い處ではなく、翌朝は頭痛がする。

幸福はこれとは別物だ。汝に付いて、生涯に亙るものである。天國は天外の空漠たる處にあるものではない。この世に直前にあり、汝自身の胸にあり、周圍にある。

アーノルド・ベネットは、幸福の定義を『正直の努力の後に得たる滿足である』といつてゐる。

けれども、幸福には、それ以上のものがある。彼自身のなるほどと思つてゐる一つの事は、『結婚しないよりも結婚した方が、大抵好結果である』といつてゐることである。配偶者の相愛、子供の信頼する相手は、無上な幸福である。

故アーネスト・カッセル卿を、大抵の人は『成功の生涯』の目標と思つてゐるのに、遂には失敗であつたと白狀してゐる。彼は大なる富貴と、權力と、位置とを得、彼の商工業、競技上の活躍には、人並以上の成功を達したのであつた。併し彼の生涯の終末に至つて、最も大事な……幸福……を失つてゐた。彼は自分でいつた如く、孤獨の人であつた。

彼のいふのに『大抵の人は、有富は幸福をもたらすといふ理論を餘り信じ過ぎてゐる。多分私は、相應に暮してゐるので、然らずといふ資格があらう。持つべき寶は金では買はれない物である。』

兎に角、貧しい人にとつては、その言葉に、何か慰安と、激勵とがある。

又セイロンの諺に、かういつてゐる『幸福な人は金持ちだけれども、金持ちは幸福だとは限らぬ。』

貧乏富豪

私と私の妻は、曾て奇妙な旅行をした事があつた。私共はサハラ沙漠の境で、オーリス山壹の

乾燥した、岩層地域に入る邊へ、徒歩旅行に行つた。私共は幕營品を二匹の騾馬に積み、二人の武裝したアラビヤ人を、案内と護衛とを兼ねて伴れて行つた。旅行をして行く中に、沙漠都市のビスクラに通ずる道路に出た。此處で普通の駱駝の縫つて行く、途筋のある處を、自働車が平原を驅つて行くのを見た。

内部には、一人は、埃除け眼鏡をかけ、一人は、ベールをかけた二人の旅客が乘つて、ビスクラの大ホテルさして突進してゐるのであつた。徒歩の愉快も、自分共の食物を求めることも、(地下に潜んでゐる菌のある土くれをあさることさへも)又野外で之を料理することも、星の下で夜分寢ることも御存じない。

私共が彼等を見た時に、一種の感衝を以つて、二人で叫び出した。

『貧乏成金よ!!』

然り、金があると、面白いことを澤山失つてゐる。ハネン・スワッファー氏は、同じ心で書いて、どんなにして、百萬長者の『貧乏』カーネギーが、ほしいとも云はぬ都市に、圖書館を建設する爲めに、寄附金を出さうとしたかを述べてゐる。世界の最大富豪の『貧乏』ロックフェラー

が胃の腑がなくて、ビスケットと麥湯で暮してゐた。

アーネスト・カッセル卿が、彼にいふのに『金錢上の最大成功も、献身的妻の愛と、子福者の家族の樂しみに、優るものが人生にない』……處で彼には、是等が得られなかつたのである。

活動的仕事は幸福をもたらす

併し家庭の幸福でさへ、全く滿足すべきものではない。なぜなれば自己以外には、遠く及ばないものであるから、利己的な危險がある。そして利己は不滿の根源である。

眞の幸福はラヂームのやうなものである。與へるのに比例して、增加するのも愛の一樣式である。それで、幸福はどんなに貧乏な者でも手の屆く處にある。

カノン・ミッチュル氏曰く、『神に幸福を得んことを望んではならぬ。合理的に有爲たらしめむことを祈れ。さうすると、幸福はその爲めに得られる。私は實際さう思つてゐる。』

幸福は一部分は受動的で、大部分は發動的だと、私には思はれる。

自然の美の觀賞、日浪の壯觀、山岳の壯嚴、篝火の匂の下に集る動物の生活の驚異、これが幸

標語『スカウトは善に止まらず、善をなさんがために活働する』

福な家庭の樂しみと相俟つて、造物主に對する感謝の念を生じ、活動的象徴によつてのみ滿足される。他人を助ける努力は、要求を充たして餘りがある。それが所謂善を發動的に行ふことである。

他人に奉仕せんとする能力を備へた愉快な家庭は最善の幸福を與へる。

どうしても直らぬ者として、或る少年が近頃少年審判官の前に、連れ出された。彼はそれが、神の誤りだと强辯した。『神は私を惡い者にしようとしなければ、神は私を助けて、私を善良な者にさせて呉れよう。』

これで南阿の將校のことを思ひ出した。彼は我軍隊の捕虜となつた時に、充分な砲兵を供給しなかつた事に對して大統領クルーゲルを、怖ろしく惡口いつてゐた。

これを要求した時に、大統領は特色のある答をして『神が味方に勝利を得させようと思へば、

味方は、砲兵があつてもなくても、勝利を得よう』といつたと、彼はいつてゐた。

この語にも眞理がある。神は、この世で生を樂しむのに必要なものは、凡て我々に與へてゐる。併し、それは、多く樂しめるか、やり損ふかは、我々次第である。併し我々は、つかの間しか生きられない。これは免かれぬ事だ。故に價値あることは、直ちに之を爲すべきだ。煉瓦や膠土、商賣や政治、金儲や其他、人の作つた問題にならぬ一時の仕事に、命も考もこれに全然包まるために、一歩では、滿足出來ぬ。

併し自然の驚異に對して、あたりも見たり、出來るだけ多くを學べ。神が汝に提供してゐる變化に富んだ美觀、興味に對して、出來だけ凡てを見るがよい。さうすると幸福の生涯に對しては、どれが價値があるか、ないかは、直ぐ解るだらう。

自分では、過去數年間『我は三年たつと死ぬだらう。故に私は、何か物にして、まとめて置かねばならぬ。然らざれば、悔いても及ばないだらう。』と思つてゐる。

この習慣は、私に急いで物事をさせるやうにした。さうでなかつたならば、多分明日にも延びることがあつたらう。偶然にも——私は大層感謝してゐるが——『またの機會』といふ猶豫もなく世

界の各處を訪問させるやうにした。

晝のうたゝねをしてゐる時に、曾つて私は、この世の生を終へて、天國の門に達して、聖ピーターが、私に尋ねてゐるのを夢に見たことがある。彼は親切さうに私にいつた。『して、日本はどうだつたか。』

『日本ですか。私は英國で暮してゐました。』

『併し、一體あの世で、何をしてくらしてゐたのか。お前の啓發のために、綺麗な場處や、興味ある處が、皆そこにあるではないか。神が用ゐるために與へた時を、徒費してゐたのか。』そこで私は直ちに、日本に行つた。

然り、晩年になつて、多くの人をなやます事は、只その時になつて、相當な事をしたかを見ることである。そして、及ばなくなつてから、時間を空費した事が解つたり、價値ある仕事をしなかつた事を思つてゐる。

自分の舟は自分で漕げ

青年にはかういふ傾向がある。世間に出ると、群衆の只の一人である。それだから他の者と一緒にやつて行くのが、よからうと思ふ。これが、精神的忠告者から、現在の生活では、地獄に陷ると警告されて、抗論した婦人と同樣である。その答は『エイ、他の方も我慢しなければならんことですから、私もさうしなければなりませぬ。』といふことであつた。

それは、量見違ひの惡い傾向である。考へて見給へ。君は君だ。君は君で生活しなければならんのだ。成功しようとも、幸福にならうとも、君は自分で之を得なければならんのだ。他人は誰だつて、君の爲めにしてくれる者がない。

私の若い時に、流行唄があつた『自分の舟は自分で漕げ』折り返へし

『泣顏したり、澁面して座つてゐるな、
自分の舟は自分で漕げ。』

これは生涯の指針である。——しかも、これで結構だ。

私が君を繪にして見ると、君は君の小舟に棹さしてゐるのだ。船を漕いでゐるのではない。

一方では、始終前方を見て、獨りでやつて行く。然るに他方では、君は行く手の方向も見ず、

自分の舟は自分で漕げ前方を見て、危険に背を向けて
他人に漕ぐのを任せるならば多分難破するだらう

他人の舵とるまゝに任せてゐる。その結果として、自分の位置も知らぬ間に、岩角に衝突するといふものだ。

多くの者は、生涯をかういふ風に漕がうとしてゐる。より多數の者は、受け身になつて舟に乘り、運命の風に吹かれたり、機會の急流に流されたりする方をとる。漕ぐよりは容易で、全く最後だ。

私は前方を見て、發動的に自分の舟を漕ぐ者に組みする。

——即ち自分の進路を開く者だ。

自分で自分の舟を漕げ。自分の舟を漕いで呉れるやうに他人に依頼してはならぬ。君は幼年の流を出で、青年の河に沿ひ、大人の大海を渡つて、彼岸に達しようとする危險な航海に出かけたのだ。

君は困難にも、危險にも遭遇するだらう。途中には、淺瀬

もあれば、暴風雨もあらう。

併し危險がなくては、人生は單調過ぎる。注意して水先を案内し、高明正大に舟を漕ぎ、しかも愉快に押し切つて行くのだ。さうすると、君の航海は、完全な成功を得ざる理由はない。漕ぎ出した流れは、どんなに小さくとも問題にはならん。

自學自習は必要である

學校を出た時には、一人前になるのには、充分教育を受けなかつたとを思へ。主に如何に學ぶかを教へられたのだ。

成功を得んとすれば、今度は自學自習で、君の教育を成就しなければならぬ。

これは、その三大綱目として、私が參考に資するものである。即ち

自己を責任を帶びるに足る者とすること（自己の職業、業務につき。将來の子供の親として。公民として且他人の指導者として。）

私の學校を出た時は、私がさながら、暗い室にゐたやうに思ひ、私の受けた教育は、火を付け

たマッチが、暗い室をてらすやうなもので、併しそのマッチで、得られた蠟燭をともし、其室に於いて將來の案内になるやうな感じがした。

併しそれは、この世に多い室の唯一の室であつた。又それで隣國や、他國の人生に入る室を照らし見ることが出來、そこの人民が、どう生活してゐるかを見ることが出來た。

自分の室は、暗く陰氣に見えるかも知れないが、もつと光線を取り入れる方法もあり、之を用ゐようとすれば、もつとよい眺が得られることが解るだらう。

併し、かくの如くして、生涯を成功に導くことは、自分の身邊の幸福を得ることよりも、より大なる事をなすことである。即ち君は、國民の爲めに何かをすることである。

一個の青二歳で、大きい南京虫にも及ばぬ者が、國民を助け得るとは、奇異に思はれよう。併しそれは、全く同じな事實である。

神は人を眞人間にしてくれた。

一面に於いては、文明は、都市生活をし、電車があり、水道が出來て、何でも君の爲めにしてくれるものがある。それが人を柔弱な弱虫にして了ふ。

それが我々の脱しようと欲する所である。

大抵のよい暮しをしてゐる少年の受けてゐるパブリック・スクールの教育は、世間では大層結構だといつてゐることは、屢御承知の通りである。よいにはよいが、教室で學ぶのは、野外や、校舍外で學ぶよりも、そんなによくはない。

其處で少年は、公明な競技、眞のスポーツマンのすること、敢爲、名譽觀念などが、同僚から期待される處である。彼等が彼を律するのだ。

斷乎として自分の位置を保ち、存在を認められる權利を得るようにしなければならぬ。換言すれば、「陶冶」されるのだ。その行程には、かなりの困難がある。それは、遂には皆爲めになるものである。

古代のスパルタ人は、彼等の子供に、堅忍不拔の强教育を施し、それから一人前の人間とされた。現代の野蠻人種もそれをしてゐる。

中央アフリカ、南洋諸島、濠洲土人の間には、これが旺盛だといふことが判る。私はズールー、スワズ、マタベルでも、之れと同樣な事を知つてゐる。其處では、青年期に達するとこれを立證

するために、藪原に一人で少年を送り出す形式で訓練が行はれてゐる。

少年は蒼鉛で白く塗られて、洗つてもとれず、とれるまでは、數週間を要する。

マサイの獅子狩り
活動的な健康的な男子の樂しみ

彼はアセガイといふ小槍を與へられる。それだけだ。そして藪中に追放されて全力を盡して生活するのだ。

彼は獵獸を追跡して之を殺し、食物としたり、被服とし、そして木を摩擦して火を起し、始終隱匿してゐる。それは捉であつて、白堊粉のある中に、他人に見付かると、殺されるからである。

この試練から出て來て、部落に

歸ると、最後に、もはや子供でない事が承認され、大人の位置が與へられるのである。

不幸な事には、文明國の普通の子供に對しては、かういふ樣なものがない。我々は我々の民族間に、柔弱な、感情的な、煙草ふかしの國民に墮落せしめずに、我青年に男性を維持する爲めには、かゝる訓練の必要を痛切に感ずる。

私がこの書に、成功を自ら選べと述べる處のものは、自分の爲めになるばかりではなく、國家の爲めになるからである。『我子よ、お前は男になるのだ』かくの如くして、國民にもう一個の男を加へるのだ。

この功德の及ぶ處は、君の模範が擴大し、他人も君の如くなることを努めるであらう。

確信を以つて前進せよ

處で、私は、人生の航海に出かける進路に於いて遭遇する『暗礁』に就ての、概略を述べようとするものである。

併し、私はこれを慰安として述べることが出來る。私の若い時には、かなり多くの醜い岩角に

對してやつて來たのだ。併しどんな時でも、向側に廻つて見ると、その光明な側をも見出したのである。

何邊も何邊も、私は前途に惡い物を見た。併し突き込んで行つて見ると、その結果は、思つたよりは、頗る善いのであつた。

私は暗黑に見えるものでも、今は却つて歡迎して、最初見えたものよりも、頗る善いものになるといふ確信を得た事が、屢々あつたのである。

私は私の書齋の机の上に、小さな標像をかけて置く。それが靈感を與へる小像であるからである。

何か醜いか、困難な事が手元にある時には、氣分をかへさせる手助けになる。

我々が富んだ國に行つて、尊貴な方とゐつける時には、その同じ像が、其處に見えるやうであつた。

それは馬上の人である。怖ろしい龍を追つかけてゐる。

聖ヂョーヂは、その名前である。

私は新舊兩時代の、彼の繪を澤山に得た。

何よりも氣に入つたのが一つある。善い繪でもないから、優れてゐる繪だといふのではない。只その聖ヂョーヂは、微笑して、惡魔を追つてゐるのを表はしてゐるからだ。笑をふくんで、元氣に龍を追つかけてゐるのだ。彼が勝つといふ事が見えてゐるのだ。それが如何に怖ろしく見える困難でも、かうして追跡するのだといふことだ。

聖ヂョーヂの場合では、綺麗な王女の救護となり、その結果は彼には滿足をもたらすことになつた。

そこで自分を擁護したり、ふり來たる災難を避けるだけで滿足してはならぬ。併し敢然として立つて之を打ち挫き、禍を變じて吉とすることに努めなければならぬ。

この緒言を總括する爲めに、ブラッチフォードの書いた一節を引用する以上の事は、私には出來ぬ。

『人情と、人の務に、人は最も完全な、そして永久な幸福を見出すだらうと私はいふ。そして人に同情を表し、人の爲めをするには、嚴正、無我でなければならぬ。凡の爭鬪、凡の罪惡、凡

の壓迫、怖ろしいこと、憎むべきこと、呪ふべきことは凡て利己的な人の不正な處業から來るのである。藝術、詩文、文學、友誼、平和、慈愛の喜悅と祝福とは、凡て同胞に盡し、同胞を愛する者によつて寄與され、聖賢、詩人、畫家、忠實な友人、愛してくれる兩親、夫と妻とのおかげである。』

格言一束

この世に於いて、成功する最善の方法は、他人に求める處を自ら實行することである。(言者不明)(自分の事を責められるやうに響く)

この世に於ける大事は、我等の地位にあらずして、我等の行動の方向にあり。(ホームス)

成功は外部の援助によるよりも自力に信頼するにますことがない。(エーブラハム・リンカーン)

灌木たらんよりは、一代の杉の木になれ。(トマス・ブラオン)

我々は、我ありと考へる處のものにあらずして、我等の考へる處のものは、我々である。(言

運搬

男らしく「自分の荷は自分で運べ」

者不明)

この世は多くの物事で充滿してゐる

それで確かに我等は凡て王侯の如く幸福になれると思ふ。(スティーブンソン)

幸福な人は金持ちだ、併し金持ちは幸福だと限らぬ。(セーロンの諺)

自分の荷は自分で運べ。(カナダの諺)

幸福は人の笑顔以上にあり、それは人の心の歡喜である。その計劃した仕事が、その機關で完全に運轉してゐる事を自認することである。(バーレット)

自分の舟は、自分で漕げ

人として、群羊の中に入つてゐる事は馬鹿な事である、
始終人に引づられることを要しながら、
正しい勇氣があるならば自分の持場を働いて
そして自分の舟は自分で漕げ。
前方の岩をば恐れず眺め
酒も女も威張屋も
これに乘り上げず、避けて行く
笑つて、自分の舟に乘り。
コーラス
だから人を自分のやうに可愛がれ
浮世の旅をする時に、
そして泣顔したり、澁面して座つてゐるな、
自分の舟は自分で漕げ。「作り替へ」

良　書

The Strategy of Life. By Arther Porritt (Morgan & Scott.)
The Forest. By Stewart E. White (Nelson & Sons.)
The Pleasures of Life. By Lord Avebury.
Self Help. By Smiles.
Friendship and Happiness. By Arnold Bennett (Hodder & Stoughton.)

第一暗礁

馬

馬

この暗礁の暗黒面は、ぶらつき、競走や、フットボールの賭、懸賞試合である。
光明面は、眞のスポートと餘技と、自分で生業を得るために、活動的快樂である。

スポートと擬似スポート
馬、その價値と、その弊害。
拳闘はスポートで、懸賞試合は慾得。
フットボール、競技者にとつては壯快で、觀覽者にとつては惡い。
金儲では眞のスポートを殺す。
新聞廣告のおかげ。
賭の弊害。
競技のために遊技をするより、競技を遊技とする方がよい。

改むべきこと
ぶらつくな。
高潔、眞純なる競技に入れ。
餘技をもて。
運を待たずに働いて生活を得、職業をよく選べ。
責任觀念を學べ。
景氣のよい時に儉約せよ。
他人の爲めに盡せ、欲する樂しみは、何でも得られる。
馬の感性。
笑つてゐろ。
良書

私の友にしてゐる馬

ディックには惡氣はなかつた。彼は私の大仲よしであつた。私は彼に術を澤山教へてやつた。その一つは、其處に止つてゐろと命令すれば、何時間も動かずに立つてゐた。印度の北西國境で、或時は、これが私には大層やくにたつた。私の中隊の馬が一匹營地を脱走して、見えなくなつたことがあつた。この馬はA四十四號で、聯隊の一番善い馬で、聯隊附曹長の乘用であつた。そこで、誰もその出奔したので、非常に氣を揉んでゐた。特に聯隊長が。

そこで私は、ディックに乘つて之を搜す

に出かけた。夜通し雨が降つたり、雪が降つたりしてゐたので、直ぐ足跡を見付けて、泥を踏んだり、雪を踏んだりして追跡して行つた。それが山岳地の荒地についていつて、屢々岩の多い處にあるので、追跡が甚だ困難であつた。數時間、數哩田舍を歩いた後に、その足跡は、ずつと山に登つて行つてゐるので、徒歩の私には、大層樂であつた。そこで私はディックから下りて、そこで待てといつて、岩や谿を這つて行つて、遂にA四十四號を見出したのだが、寒さで震ひて、傷から血を出し、全く驚いてゐたのであつた。再び山を下りるのには、大分時間がかゝつたが、遂に下に着いて見ると、ディックはおとなしく我々を待つてゐた。そして間もなく凱歌を奏して、我が獲物を連れて歸つた。

可哀さうなA四十四號は、それが少しも治らなかつた。——もう二度と元の馬にはなれなかつた。そして遂には、熱病に罹つて死んだ。けれども、大佐は、ディックと私とで、それを連れて歸つたのを、非常に喜んでゐた。——私には其後とも嬉しい事であつた。

それが、かういふ風に行つた。

ディックは私の「一等の軍馬」であつた。それは、私の唯一の財産であつたが、練兵に乘つた

り、一寸散策に乘る外は、如何なる目的にも、彼を用ゐることを許されなかつた。馬具を付けたまゝ彼を驅つてもいけなければ、狩りに乘つてもならなかつた。

處が或日、營地の近くを乘つてゐた時、立派な野猪が野原を跳んで行くのを見た。これが私には我慢が出來なかつた。私は私の印度人の馬丁を呼んで、槍を持つてこさせた。そしてこの猪を捕る爲めにディックに乘つて飛び出し、規則も命令も皆忘れて了つた。一生懸命に駈け出して、之に駈け寄り、槍を突かうと、前に寄ると、ディックが急に止まつて、立ち上つた。さうして、私を地面に投げ出さうとした。その譯は、私の彼に敎へた藝の中で、誰かに低く禮をする時は、後足で立つて、前足を上げることであつた。そこで猪を突かうと、前に寄りかゝつた時に、ディックが私がお辭儀をするのと思つて、この藝當を演じて、立ち上つたのであつた。

猪は、ディックが、こんな馬鹿な事をしてゐる間に、逃げるのに容易であつた。處が猪もさる者で、『今度は二人を殺してやらう』と思つて、逃げもせずに、我々の方に向つて來た。

彼が我々に突進して來たので、槍で防ぐ構へをしたのであるが、前に寄りかゝると、ディックは又立ち上つて、槍は當らず、猪は牙で、ディックの後足にかなりの突傷を與へたが、幸にも腹部に

は怪我がなかつた。二度同じ事があつた。併し猪が、又我々を攻擊して來た時に、私の拍車で側をついたので、高く跳んで、立ち止まらず、猪はその下を通つたので、私は槍で、猪の脊を突き刺し、之を殺して了つた。

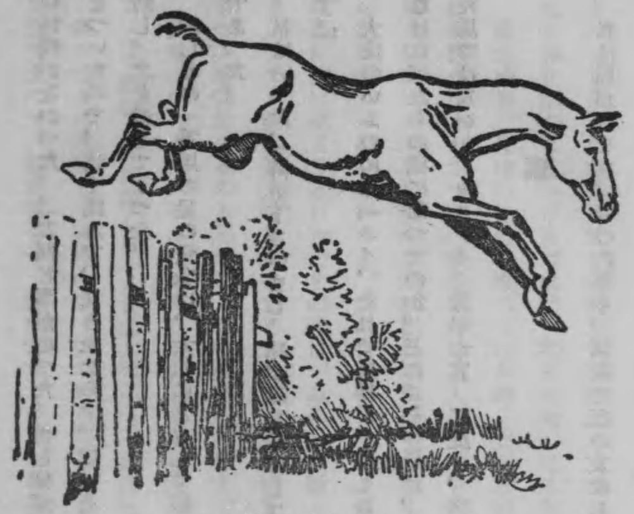
併し私の一番馬の足の怪我は、大佐にどうして顏を向け、何んと辯解してよいか、こまつた事であつた。

私はいつた、『御免下さいまし。猪が私を攻擊して來たので、防禦しなければならなかつたのです。』

大佐のいふのには『エイ、それで結構だ。併しお前の一番馬に乘るのに、どうして、槍を持たなければならぬ樣になつたのか。どれ。その馬は、A四十四號が脫走した時に、之を捕へてくれた馬ではないか。ヨロシイ。青年士官。二度と、猪を追ふのに、その一番馬に乘つてならんぞ。』

馬

私は馬が好きだ。私の經歷中、諸處で私の友にした別々の馬の名譽賞が、私の室の壁にかけて



一例、ほんのスポート

ある。

彼等は私には良友であつた。戰爭でも、狩獵にも、ポーロや競馬するのにも。

競馬は眞に人氣ものゝスポートである

その立派な動物、最善の飼養、微細な點までの訓練、競馬術の名手の指揮の下に、全力を盡して勝利を得んとするのを見るのは血を沸き立たせる。

併し何でも、さうだが、競馬を見て、絶えず繰り返へすと、飽きて來る。丁度上等な燒肉を食ふやうに、鹽が風味をつけなければ、飽きると同樣だ。

行く多くの者で競馬に金を賭けて、風

味をつけないものがない。實際、賭もしないでかういふ處に行くものは、一寸風變り者だと見られてゐる。

絶えず注意を要するものは、金の損得であつて、馬の賞讃ではない。

實際、競技をスポートとする大部分は、こんな處には出ないで、安樂椅子に座つて、電話で樂に賭けをして居る。

彼等はかくの如くして、惡い事はするのでなくとも、チヤンスを遊びにして樂しんでゐる。出札人に爲めになる外は、誰れにも爲めにはならぬ。

懸賞は金儲けになる

競馬が國民競技と呼ばれてゐると同樣に、拳闘の試合が續いて來る。

善い拳闘試合は、人に立派な男の全盛の觀を與へる。その微妙な訓練、最高妙技、公明正大な試合、氣合等嚴格な規則に從つた攻擊、防禦を遂行する勇氣、忍耐は見物だ。

けれども私としては、大きい廣告をしたアルバート・ホールに於ける試合よりも、スタディーム

に於けるボーイ・スカウトの拳闘の試合の方を喜んだことを告白しなければならぬ。

一方は試合の爲めの、眞の試合の努力であつたし、他方は金儲計劃の大仕掛のものであつた。

アルバート・ホールに於ける場合には、各試合者は數分間の打合(しかも、大分組合つて)に何千ポンドといふ莫大な報酬を得るのだ。見物人は、之を見る特權を得るために重税を拂ふのだが、實際勘定に當る者は、勸進元であるのである。所謂高尚な競技といふのは、寧ろ廣告戰により公衆から金を得る覺醒である。

拳闘、そのものは立派な運動だが、今は金儲になつてゐる。

この種の歴史的事例を擧げれば、デンプシーとカーペンティーアの間にあつたアメリカに於ける大廣告戰であつた。そこで何千人といふ見物人が、拳闘としては大したものでもない數分間の興行に、何千ドルを拂つた。然るに興行人は、何千ドルの廣告費を控除しても、一攫千金の富を得た。

これがトム・スプリングが、千八百二十四年に、ウオーセスターで、大英賞を得る爲めに、ジャック・ランガンと戰つたのとは比べものにもならん。

ランガンが遂に倒されるまで、奮闘七十七合までやつた。

試合、しかも金を得さるものだ。

フットボール大競技だが

フットボールは多年の間は、クリッケットや拳闘のやうに、特に高潔な試合であつた。これが職業試合になる以前の事であつた。

私自身も古いフットボール試合者であるので、この試合を好きだ。君等もさうだと思ふ。諸君も私も、それを最も立派なものとして見上げてゐる。健康と强壯を與へるのに、之に優るものがない。活動と勇氣、紀律と善い氣性、それから、何よりも、味方の爲めに無我になり、自分の偉さの爲めでなく、試合をするといふ大教訓を與へる。

立派な試合だ。見てゐても發憤するものだ。この理由で成金の爪牙にかゝつたのだ。

會社が今では、フットボールのグラオンドを計營し、試合者を買收し、新聞で公衆の熱狂を起し、大きな『門』を設けてゐる。

試合一傍觀してはならぬ

自分で試合をするではなし、我青年は他の群衆と共に吸込まれて、傍觀者になつてゐる。

傍觀してゐると、私が競馬に關して述べた噓がいくらかないと退屈になる。それで賭が試合の特色になる。

門の外には、群衆が見える。競技を見るのに入る面倒もせず、その進行の最新報を得て、賭の變化を見てゐる。尙多いのは、競技場の近くにも行かず、內で賭をやつて、安樂に自分共のフットボールをやつてゐる。

そして之を試合と呼んでゐる。

金儲は眞のスポートを殺す

それからトランプがある。識もトランプ遊を、遊技と思はないだらう。それは金の爲めだ。

ゴルフも金儲の他の手段に下落してゐる。クリッケットでさへさうなる傾向がある。

『職業的競走、競漕は實際は下火になつた。なぜならば資本を出す人は、直ぐ金儲にはならんと思つたからだ。』

自轉車雜誌は賭の評論をして、かういつてゐる。

『自轉車大會は殆んど各國で流行だ。これは、スポートは、不誠意な練習の害毒を受けた、避くべからざる結果である。』

かく我國民競技の將來を戒めるのは、一般に惡い。

それでも、賭や傍觀は、多數に愉快を與へるならば、之を樂ませて置く。暫くは愉快にもなり、氣晴しにもならう。併し確かに幸福を得ることにはならぬ。故に時と金とをよく費した事にはならぬ。

私はその何故かは知らぬ。併し馬に關係して見ると、正直で通つてゐるやうには思はれぬ。それだから、賭をするのにも、馬を買ふのにも、警戒をしなければなっぬ。

どの博勞も正直だと思つてはならぬ。

私は正直な賣り手から、馬を買つたことを覺えてゐる。彼はその缺點と、善い點とを、正直に私に話した。そして、それに拂つた金高や、その馬を訓練して、直す爲めに、いくらかゝつたか、其金利を見なければならぬといつた。

彼は私の知つてゐる騎手の中でも、達者な者であつたから、訓練は有効であつた。(私はエランズラーグトの突擊をして死んだチショルム大佐の事を話してゐるのだ。)それほどだから、そのいふ値段で、馬を買つて、之に乘つて見ると、私が拂つた以上の値打ちがあることが解つたので、私も彼の例に從つて、正直に、現金を餘分に贈つたことがある。

警戒せよ

人に投機心がある間は、スポートが高潔であらうが、あるまいが、問題になりはしないではないか。誰でもそれをしてゐる。賭博は人の性である。人の性は變へることが出來ない。何で氣を採むに及ぶものか。

運だめしであらうと、研究式であらうと、勝利を得て滿足が得られることを知つてゐる。併し私一個としては眞の試合を、小數の成金者の爲めに、多數の青年を犧牲にして、金儲けに墮落せしめることを憎むものである。それが自分共は、偉いスポーツメンと信じてゐても、巧みに賭博に導かれるやうになる。この假面の下に、頗る大多數の者が、破滅に陷るやうになる。この詐欺を澤山見たから、私は君等に警鐘をならさうとするものである。それ故に、これに陷つて馬鹿を見ぬやう、君の警戒を要するのである。

も少し年をとつたならば、澤山の善事が、君の前に開放されてゐるのに、こんな氣晴しを要するかどうか、自分で判斷が出來よう。

併しそれは、成金の要する處のものではない。彼等は若くて瞞し易い中に、諸君を捕へようとしてゐる。そして、一度その爪牙にかゝると、再び出られないことは、非常に屢々ある。

何人も何人も賭をして金持ちになつてゐる。それは勸進元や金貸になつたからである。併し私の知つてゐる處では、賭によつて、さうなつた者がない。それは、勸進元や、金貸の詐僞にかゝつてゐるからである。

富裕になつて「儲けた」といはれる興行人は、實際人は大概、馬鹿だといふ事に突き込んでさうなつたのである。

勝者の一唯實眞

（それは私が曾つて「女は誰でも知つてゐる事」といふ演説をしたのを思ひ起させる。この題目は、男の百分の九十は、馬鹿で、其他は、全く馬鹿だといふことを女が知つてゐることを表す爲めであつた。）

そこで、又、あまり著名でもない競技會にも、公衆を瞞く金が多く、選手の、主領株と合同して詐僞師の手に入ることになる。

賭博の害毒は何か

それが自然に起る疑問だ。さて、眞のスポートに喰ひ入る病毒は問はないにしても、賭をする者には、愚人の遊技である。なぜなれば、殆んど大抵は、遂には金を投げることになるからだ。

長い中には、少しばあるかも知れないが、賭をして得をするものが無いからだ。そこで、よく注意して、之を遠ざかるにあらざれば、危險な競技である。

人が大金を儲けてゐるのを見ると、一賭やつて、福運をめくつて見ようかといふ氣になる。それが急速に富を得る新方法のやうに見える。けれども、屢々急激な破滅の元になつてゐる。殆んど如何なる場合に於いても、人格に貪慾といふ汚い特性が發生してくる。世間の所謂スポーツマンは他人から取れる金の爲めに勝を得んと欲するものである。貪慾が起ると、正直は失はれる。他人の金を切望するやうでは、眞のスポートの貴重な點がなくなる。

多くの者は、金を儲ける事は、容易な方法と思ひ、彼等が出來るよりも、もつと深か入りして了つた。それから怖ろしい罪惡が起り、そして負債を拂ふために盜みをしたり、主人や他人の金を使ひ込んだりし、又はその結果を免れる爲めに自殺する。

これが新聞に何遍も〳〵繰り返へして見える怖ろしい話である。併しこの警告は、他の若い馬鹿者には氣が付かない。

此處に、大戰前十二年間に、ロンドンだけで、賭博の損失の結果として計算された記錄がある。

自殺又は自殺未遂　二三四
使ひ込みと竊盜　三、二三四
破　産　五三〇

十二ケ月間に、英國で、興行人と、客との間に交換された金額は、五千萬ポンドに達してゐる。そして大部分は、賭博商賣人の手に入つてゐる。

廣　告　の　力

賭博の不健全な發達は、大に新聞の或方面に罪がある。

新聞は標準を、正しい方面の有力な輿論に置き、又は公衆の趣好に置いてゐる。これが悪い方面に赴くのだ。

不幸にして、過去數年前よりも、今日の新聞は、公衆に從つてゐるのが多いのだ。

暗殺、離婚、恐怖と醜悪に對する、不健全な趣好を挑發する日曜新聞は、職業選手のフットボールや、競馬等を賞讃して、夕刊で競爭し、國民の繁榮に資する大なるものよりも、より重大なる

かの如く、大袈裟に書きたてゝゐる。

ウイクハム・スティード氏は、タイムス記者として、獨立の意見を保持するためには、新聞は經濟上獨立しなければならぬことを、最近指摘してゐるが、誠のことである。併し、さうするために、彼等の、多くは、懸賞競技、活動のスターの、興行者が出す資金に屈しなければならずとして、公衆が、新聞の廣告に刺戟され、自分のより善い判斷では、平凡だと思つてゐるものにも、全くふら〳〵の態度に出るといふことは、遺憾なことである。

併し、これに打ち勝つことも出來ず、群衆は餘りに愚劣であつて、そのことを熟慮もせず、問題の兩面も考へる勞もとらないでゐる。さうしたならば、之を商賣にしてゐる興行者や、フットボール會社の支配人や、懸賞競技成金の手に、金を振りまくこともせず、スポート、眞のスポートの爲めにその愉快と健康とを得るやうになるだらう。

私は活動映畫にある善い物語や（シネーマではなく、キネーマといふのは、正しい發音だといふことであるが）手まね、身ぶりで、考を表はす俳優の、實に面白い劇の所作を見るのが好きだ。同時に、彼等の技術は、よいには善いが、舞臺に出る俳優以上には出ない。その上、人の聲や

涙で、眞の肉と血とで演ずる時の、生命と精神とが役に出てこない。

それでも、モーリー・ミックボードは、面白い道化役者で有名なチャーリーのやうに、スクリーンに出て來ると、その綺麗な顏と、魅力ある所作とで、百萬兩だとして知られてゐる。

そのいづれが市に來ても、新聞では、前以つて、注意し、準備した記事を掲げ、その日が近付くに從つて、益々熱狂が激烈になつてくる。

女主人公又はその夫君から、國民に對して、挨拶の榮を賜はり、到着の時日とか場處が充分に發表され、群衆が、スターを迎へる爲めに、停車場に人波を打つ時になると、廣告も高潮に達するといふものだ。いくらよい俳優に對しても、世間はこんなことはせぬ。併し群衆の誰に、なぜさうするかと問うても、千人に一人も答をする者がない。

それでも、同じ市で同じ停車場を通つて、陸海軍軍人が我々の爲め、國家の爲めに戰つて、地獄から出て來ても、注意もされず、賞讃もされずに、入るまゝにして置く。

私は國民の感情、好意とを責めるのではない。併し新聞廣告で、かくも容易に、世人が吸ひ込まれる事實をいふのである。

眞のスポート

こんな事を讀むと、私をスポートをけなす者と思ふだらう。數年前だが、鬪牛が、大勢の人に中止を命ぜられ、そして議會に對して抗議を提出した事がある。

其後彼等の反對者のいつた事によると、牛に對して、慘酷だといふよりも、之を見て樂しむ人を憎むのだといふ事であつた。

處で、私も全く同じだと思はれるかも知れない。さうではない。私は眞のスポートを樂しみ、人一倍之を樂しんで居る。實際、私は大抵の人よりも、之を樂しんでゐると思ふ。

そして、どのスポートよりも、之を樂しむ人を見るのが好きだ。かゝる人がある程、私は嬉しく感ずる。

併し大勢の者は、惡い方向に行つて了ふ。實際成金の手にはかゝらず、スポートをしてゐると思ひながら、スポートの名の下に、成金の財布に金を投げてゐる。

私も金があつたらこんな危險をして、賭をし、そんな具合に、多くの金を失つたかも知れない

と思ふ。併し私はそんな事はしなかつた。又金があつても、こんな事をする、算術が頭の中になかつた。

その上『一度咬まれると、二度目には臆せる』私が學校の生徒であつた時に、一度賭をして敗けた事を決して忘れない。私はシテー・サバルバンに對して、バックといふ馬に賭をしたといつならば、私の時代をうち切ると云はれよう。兎に角その馬に十八片を賭けて、敗けて了つた。そして、それが競馬を見て、賭をした最後であつた。

又私は、その馬や騎手を知つて居ると、素人競馬が好きだつた。特に自分の乘りならした馬が加つてゐる時には、尙好きであつた。内に居て、安樂椅子に座り、知らぬ馬を眺め、之れに賭をするなどとは、全く異つてゐる。それは發動的のスポートで、受動の仕返しではなかつた。

又、私はブットボールで、學校組に加つて競技して、その競技を樂しんだ。そして私は、一層素人仲間の善い競技を見ることを樂しむ。併し、相當有益なる競技をしてゐる人々と座つてゐて、之を見るのも私には變化の有る樂しみである。そして觀衆の大群衆が、金が危險になつたり、確實になつたりする時に、熱狂して叫んでゐるの見たり、聞いたりするのも面白い。

スポートは何か。私の考へでは、只に傍觀群衆や、又は人に代つてもらつたり、金を出したりして、するのではなく、各人が發動的に競技をすることである。例へばゴルフをする人のやうに、倶樂部の仕事をするのに私は侍者を雇ふ考はない。多分私は現時の高い給金を拂ふことが出來ないし、多分私の言葉は彼の耳を聾にすこともあらうし、多分私の下手なのを批評されるのを恐れるのか、多分末には何にもならぬ仕事をさせて、子供等を働かすのを好まないのだらう。併し私の主なる反對は、自分の競技は、自分でする方を望むからである。それが丁度鹿を追跡したり、鮭を釣り上げるのと同樣である。私は、私の仕事を、僕にさせようとは思はぬ。イヤ、私の髮でさへ他人に刈らせはせぬ。それは自分でする——髮の毛がある間は！。

如何にして、正直に金と樂しみを得べきか

君等はかういふだらう。

『スポートを見ながら、批評をするのは、大層結構だ。併し

閑時に何を爲すべきか。

どうして金を得べきか。

競馬や、フットボールに行かなかつたら、どうして樂しみを得ようか。

處で、如何なる種類の青年にも適するようなプログラムを定めるのは、些か難題である。其者が富んでゐるか、貧しいか、中位か、又は都市に住んでゐるか、遠く田舍に住んでゐるか、冬か夏か、一人でするか、仲間があつてするか、屋内か屋外か、晝か晩か。

自分で答が思ひ付くか。

私は思ひ付かぬ。併し、此處に助けとなるような廣義の提案がある。

その大祕訣は、次の言葉を標語にすることだ。

ぶらつくな。

油を流したやうな海に浮ぶことは、面白くないが、少し風があつて、海らしい處に出て、常に波が前の方に起り、一波去りて、又一波起ると、又頗る別な氣持ちがする。

人生を漕いで行くのに、常に新しい仕事の波があり、元氣に活動する間に、愉快を見出すであらう。

そこで、その答として

閑時、

金、

幸福

に關して何をなすべきか

眞のスポート及び餘技、

適當な職業と儉約、

他人に對する奉仕

に向つて進めとは私の提案だ。

スポート

私の考へる眞のスポートとは、傍觀せずに、爲めにもなれば、自分でする競技及び活動なら何でもよい。運動場は、多くの中心地には稀れで、競技を望む凡ての者に適しないことを私は知つてゐる。それでも、今日用ゐられてゐるよりも尙千人に適する餘地があり、又これまで役に立たなかつた、他の異なる種類の運動場がある。何か工夫すると之に適する、多くの競技を提議することが出來るが、凡てに應ずることは困難なことも止むを得ぬことゝ思ふ。

主なる事は、自分の居る境遇、環境に、最もよく應ずるスポートを自分で考へることである。

併し、自分で旨く作れないならば、兎に角上記の條件に應ずる者を提案することが出來る。それは遍路に就いていふ最後の章に述べてあるから、之を發見するであらう。

眞のスポート

眞のスポートの題下に、しかも大した費用を要せず、一樣に公開された者は登山である。

『登山ですか。登山なら澤山英國ですることが出來る。』といふだらう。

處で、之が澤山出來るから、それがどうしてするかを述べよう。二萬呎の山に登ることは、壯快な事業である。併し始終縋り付いてゐるのではない。指や趾で登る力を試めすといふ困難は、時々あるだけである。落ちるものなら一氣に二、三千呎直下してから突き當るのだ。自國に於いても、同當な困難をして、岩面を登つて、二、三百呎墜落すると同樣な効果を得られる。小さな山に登るのでも、丁度同樣な奮起が得られる。そして、丁度同樣な神經と、忍耐と技巧を要し、一連の繩で、一蓮托生の仲間になる。

同時に、注意して訓練を積み、經驗ある案内人がなかつたならば、非常に危險な修業である。

『困難に打ち勝つ効果を收めるのは、山の高さではない。』とは、エベレスト山遠征の引率者たるブルース將軍は、英國の青年には、峨々たる山を登るの可能なることを私に談つた處であつた。彼はその方面の熱心家であつた。之れがスポートとして、善く知られても居らず、一層實行もされないのは、驚くの外はない。それが大英國の殆んど至る處に、實行されることを、青年が實感してゐないのに、大なる原因がある。

山がないならば、岩山や、石切場や、崖なら大概得られる。是等は、三四人組になつて、登攀綱を持つて行くと、立派な練習になる。私が三二〇頁にある、アンデス山に出かけたやうに、一人で登山するのを往々聞くことがあるが、それは全然誤りである。自信を得るのには、一度で充分である。併し墜落したり、挫傷して落伍しては何にもならぬ。登山は組をなしてすべきもので、又そうしなければならぬものだ。といふのは、かういふ理由があるからだ。一連の綱の各人は、互に他の助けになるやうに力にならなければならぬ。それは、それだけで大教訓である。

登山は、神經、筋肉、忍耐等の肉體的強壯の絶好なものである。達者な登山家には、丙下といふ人間はない。そして、それは非常に面白い善いスポートである。

エベレスト山。休みなく登つて行く。

それから、觀察力を要する地方を見る目と、工夫とである。

私が曾つて、アルプス高地に從軍する、イタリーのアルプス隊に、所屬して行つたことがあつた。是等の兵は、全く山仕事に訓練され、全部が山岳地の住民から仕込まれてゐた。二三哩向ふの、二千呎位も深い、谿谷の向ふ側の積雪の大斜面に、敵が見えた。將校は攻擊の一般方略を與へられた。

そこで、彼等は、長い線になつて、間隔を置いて、展開して座り、そして、反對の傾斜面と、斷崖とを凝視してゐた。彼等は望遠鏡で之を研究し、各が登攀分遣隊の特別な進路を搜し、而して、下から上方に登つて作業する時に、見出すべき地標を注意してゐた。

登るにつれて進路を撰擇し、之を利用するのは、山岳を登るのに、觀察法に熟達する程度に依

つて、成功するか、只の平凡な登山家になるのであるが、登山には、絶えざる變化と、興味と、助けとを與へるものである。

それから、不可能に見える時でさへ、平靜な決心と、旺盛な元氣とで、困難に直面することを學ぶのは、德育上に効果がある。

かくの如くして、同樣な精神で、人生の難局に直面することが出來、そして、それに取り縋つて、障碍を乘り越え、之を迂回して、別の進路を試みて、遂に目的地に達することが出來る。

最後に心靈が其處にある。山岳登攀に之を見出すとは奇妙な事だが、其處にそれがある。仲間となつて登る、併し、廣大な、この世ならぬ展望を有する壯大な絶頂に達する時に、獨り離れて端座し、そして考へて見よ。

そして考へる時に、凡ての不思議な靈感を飲み込め。再び下界に下つて來た時には、肉に於いて、心に於いて、精神に於いて、全く別人になつたことが判るだらう。

趣味と、その價値

目分で物を成す習慣は、段々に發達して、その人の日常の職業の各方面に發展することを、私は認める。しかもそれが頗る健全な習慣である。『一事をなさんとしたならば、之を自ら成せ』とは習ひ性をなすものである。

家事上の些細な事でも、沒頭するやうになると、仕事は色々な事を敎へるものである。少し練習すると、鐵槌を用ゐるのに、指は打たずに針を打てるやうになり、電燈發火器をはめる時に、電氣の働きの知慧があると、手早くなる。

大戰になつて、野菜や、果物が得られなくなつた時に、野菜を作つたり、自分共の食物を植えたりすることを、我々の多くに敎へるといふ祝福をもたらしたのであつた。割當ては、議會の節酒改正案よりも、居酒屋に、もつと損害を來した。そして同時に、澤山の衛生法案又は政策改正案よりも、人々の健康、滿足に、もつと効果があつた。自分の園圃は、誰にも立派な遊樂場である。そして働き手の得られる最善の慰安である。それは大多數の者に、屋外の第一の眞趣味を與へ、そして、草木の生長や、小虫、毛虫に就いて、第一敎訓を彼等に齎してゐる。即ち自然研究である。

自分の手で、物を作るといふことは、子供の自然の性向である。人が年取るに從つて、趣好を失ふ者が非常に多い。併し、自己表現のこの、自然の形式を保つ處、生產に對する自然の欲求を滿足される處に、習慣が出來、空虛な人生を滿たすものとなる。趣味を持つてゐる人は、決して時間を空費することもなく、手持無沙汰な事はない。そして、新聞に出るやうな他の誘惑に、容易に引込まれることはない。趣味は、その人には保護物である。

何か趣味を持て

趣味と手藝とは技巧に導き、物を造るのに全思考と、餘力を傾ける人は、その仕事の完成に、無量の發達をせざるを得ない。心を手に用ふる處に、想像と工夫とが進み、そして趣味の仕事から、人が往々發明をするやうになる。

居室或は事務所、或は工場を見廻して御覽なさい。誰かの發明になつた澤山の物品が目に付く

だらう。

何かの發明まで發展する趣味の人であるならば、それが力となつて、財的に君の助けとなるばかりでなく、多分同胞には祝福するものになるだらう。

又屢々趣味の實行によつて、人は現職業から全く立ち離れてゐても、生れつき最も適する物になるものを發見したのであつて、そして、それが、これから持續すべき新方面と、眞の仕事とを示したものである。そして、若しも彼が、以前には四角な穴に、圓い杭であつた者が、今度は、本來適當な圓い穴を發見したのである。

併し、趣味は、一概には云はれないが、兎に角往々入用な金を得ることが多く、金の爲めに、金を求めるといはないでも、之を遂行するに足る或る必要な高は、人の厄介にならずに、之を得られることを、私は確信してゐる。

ヂョロックスといふ古い狩獵の本に、ヂョッグルブレー・クラウディといふ人物がある。その大道樂は、ステッキに造る目的で、生け垣や、森でステッキを切ることであつた。私にも亦、多くある中に、その趣味がある。別に大した事でもないが、之を實行するやうになると、善いステッキを捜し

て、何哩も何哩も引かれて行くのに充分である。さうでなかつたら、お話にならぬ程退屈するに違ひない。そして之を得た滿足、之を眞直にしたり、ためたりして、善いステッキを得ると、喜びが非常なものである。甚だ簡單な道樂でも、誰でも實行出來るもので、その引力あるものだといふ例を、私が示すに過ぎない。

その上、それが金にもなるといふ効果がある。私はこの特殊な方面に入つてゐる少年を何人も知つてゐるが、それで、何志も儲けてゐる者がある。

併し、この方面の趣味を有する人は、相應に金を得ることの出來ることは往々である。かくの如くして、賭をして金を得るのに、不可能なことをするよりも、これと同樣に趣味に耽けつて、もつとこの方面に進むことが出來る。そして自分の努力で得た金は、他人から小盜みするよりも、頗る嬉しいものである。

金を得る餘技は別として、自分の趣味に從つて、選擇される道樂が澤山ある。

音樂、繪畫、彫刻と劇、是等は都會の人に容易に得られる。そして、市の美術展覽會、博覽會や音樂會などのある處をうろつく必要がない。

併し、私の奬勵するのは、只に受け身になつて、之を樂しむといふのでない。効果を得るのは發動的自己表現である。

所謂、自己表現といふのは、作歌、彫刻、提琴、塑像、スケッチ等である。又スタンプ、貨幣、化石、骨董、昆虫、或は花卉を蒐集する興味もある。

自然は、鳥類、植物、動物の研究をしてくれろといつて田舍に逍遙してゐる。鳥の飼養、果實培養、ジヤム製造、兎飼、又は鹿皮靴の製造、又は何んでも好きな古物を得るために田舍に行ける。そこから選擇されるものは澤山にある。そして之を把握すると費用も得られ、現金ではなくとも生涯の滿足が得られる。

適當な職業

金錢に關していふと、我々の多くには、他人の厄介にもならず、生を樂しむ人生の行路に就き、人の之を樂しむ援助をするのに、確實な收入を蓄へることは、我々に必要である。

そこで、金を注ぎ込んで、より不幸な者から、多くを取り戻す機會を求めずに、正直に仕事によ

つて、確實な收入を得るのに、時間を費さうではないか。

そして、第一に、生涯の職業の準備をすることである。

私が、ゴルフに子供を雇ふことを欲しないといつたのは、將來の希望を與へないのに、一寸金になる仕事をさせて、かかる方向に、子供を陷れたくないからである。彼が大人になると落伍して、何等特別な仕事を得られなくなる。そして、大抵の場合には、彼は浮浪者や、浪費者になつて了ふ。

處で、かういふ風にして、人生の誤つた出發をする者は、ゴルフの子供ばかりではない。多くの子供等は、よい給金を得る、仕事を搜すが、親が之を取ることをさせて、行く末を考へたり、どうして、將來爲めになる方向に進むかを考へることを忘れてゐる。

是等のよい給金を得る子供の仕事は、遂には何もならなくなるものが多過ぎる程あり、そして、末に報いられる職業の第一階梯に進むべき、人生の丁度重大な時期に、青年を行詰りに陷れてゐる。

それから、非常に普通にある失敗は、青年が有望な方向に進める職業を見付けたとしても、

その職業がよいと思つても、初めに眞に之に適するや否やを考へないので、遂には自身で、之に適しないことを發見するか、その雇主は、その適任者でないことを發見して、之を出ようとし、何か他の仕事を見付けるようになることである。彼は圓い穴に、四角な杭であつて、そして進路を得ないことになる。

先づ考ふべきことは、教育される時代に、如何なる種類の仕事が、最も適するか。そして最初物になりさうな違つた職業に就いたとしても、常に正しい方面に注意を拂つて、その機會を得たら、之に直進することである。

若しも、四角な杭であつて、四角な穴に注意してゐるならば、遂には適所が得られる。

『鼻毛に遺臭を付けて置いて、鼻を地面につけて行き、そして、追跡物の末に就いて、餘計に氣を採むべきではない。その途中に面白いことがあるので、結末にあるのではない。

私が或る場處を出た青年であつた時に、私は常に、第一に遭遇する物に取り付くのを、規則としてゐた。そして、よりよき物を得るまで、暫く之を善用したのであつた。ミミズでヤナギバエを捕り、ヤナギバエでスズキをつるのだ。スズキでカハラソを捕ることが出來、それから衣服の

料が得られる。』

それは『立志商人のその子に與ふる書』にある忠告である。若しも『衣服の料』が誰れかの爲めに、心地よい毛皮の着物を作れるやうになつたら、その職業の成功に達したのである。かくして、生活する方法を得たばかりでなく、又他人に對する奉仕の任務をなし得たのである。

そして、それが人生を樂しむといふのだ。

若しも豚肉屋の注意に從つて、金になる職業を得て自己の性にあつたことを當てようとするならば、多くの場合に於いて、航空隊に應募するがよい。任務が長くはないが報酬もよければ、仕事も非常に興味がある。

併しもつと確實な教育になるもので、そして、その精神を汲むならば、學校教育を完成することである。其間に人格も得られ、そして一方の進路を得た時に、その職業に就いて、より好都合な『人格』が得られる。

同樣に、海外領土に、生活することを、豫期するならば、遂に最上の方法は、その地方の經驗と友人とを得るために、暫くその地方の警官に奉職することである。これも同樣に、教育にもな

れば、俸給も得られ、人格涵養にもなる。

節　儉

大戰以來我國民は、非常に惡化したとは、我評論家の我々に告げる處である。處で、私には、それは解らぬ。ロンドン學校の市の係長は、今日の兒童は、昨日のそれに比すれば、ずつと元氣であつて、日々、よりよくなつてゐるといふことが私には解る。それは、兎に角有望の徵である。

今は金を蓄へる者が確かに以前より多い——そして侮辱する者が、より少くなつた。この二點に何か關係があるか、私には解らぬ。けれども、それが事實になつてゐる。

私は次の頁に、自制の實行によつて、人格が得られることを述べたが、又も一つのものが得られる——少くとも往々——そして、それは金である。酒、煙草、餘分の食物及び得られぬ物に耽ることを節することにより、是等に費す處を蓄へる。そして長い間には、それは馬鹿にしたものではない。

私は自分ですることを欲しない事は、人にせよと決していはない。そして、私は私の若い時代に、些かこの節約をしたのであるから、これをお勸めしようとするのである。

私は十人家族の第六番であつた。そして私の父は牧師であつたが、私が三歲の時になくなつた。そこで私は、所謂裕福の中に育つたのではなかつた。そこで私は軍隊に入つた時には、小額の收入で、最善を盡して生活しなければならなかつた。

それが少々奮鬪であつた。中でも、朝食や、中食は、會食したことはなし、煙草ものまず、酒も飲まず、そして軍隊勤務の餘暇に、繪をかき、文章を書いて金を得たのであつた。

併し私は充分に働いて、しかも、その奮鬪は樂しみであつた。そして私は遂に『目的を達した』のであつた。私には幸運といふものは何程もなかつた。併し付け加へなければならぬが、私は自分で、多く之を摑へたのであつた。普通にいふ幸運といふのは、實は多くは、機會に見込を付ける力である。そして之に躍進して之を摑へることである。多くの者は、無爲にして幸運の來るのを待つてゐて、そして運のないことを、つぶやいてゐる。

私が得ようと欲するよりも、早く達したのは奇妙な事であつた。私は家族の助を受けずに自分

を維持する以上に、多くを爲す野心は、實際なかつたのである。私が彼等を扶助することが出來る物があつたら、これに優さることがなかつた。そして私は、私の職務が好きであつた。なぜならば、人と馬との間に立ち働くことであつたから、私は全く滿足してゐた。

併し昇進して上級に進むやうになつて、俸給もよくなり、非常に有望にもなつたけれども、そんな考を持つのを好まず、只その位置に留まることを望んでゐた。私の少佐に、昇進を斷ることが出來ないかと問うたことを、よく記憶してゐる。併し少佐は、それは不可能だと、笑つて、その理由を指示した。それで私は進級しなければならなかつた。私はかくして進んだが、初めに節儉を實行したことを大に感謝したのであつた。

二三日前に、旅行や、友人訪問の、私の若い時の日誌を見て喜んだ。私の費つた一錢の勘定でも、信仰のやうに書き、費用に當てる爲めに、入金をば、凱歌を奏するやうに一錢毎に書き入れてゐた。私は誰れもさうだらうが、次の言葉の誠なることをいふことが出來る。『小金に氣を付けると、大金は自然に集る。』

そして、私はかういふ風にして、自分を助けることが出來たばかりでなく、自分の經驗から患

告を與へることが出來、又私の中隊の友人の多くに、同じ方向に先例を與へることが出來た。その結果として、酒保の利益はなくなつたが、貯金高は增すやうになつた。兵は益々健康となり、益々幸福になつた。そして軍務を終つて行く時には、自分で職業を營んだり、自分の生活をするに、金を手に入れることが出來た。

これを讀む諸君も亦さうである筈だ。金がないならば、どうにかして金を作れ。作れば作れる。雨天になるかも知れない。さうしたら、他人の工面に厄介になるには及ばぬ。雨天のことを考へよ。多くの者が、その事を忘れて、自分の怠慢の爲めに、終には苦しむ。

既に金があるならば、之を費す理由はない。しつかり握つてゐるのだ。之を費す必要があるならば、他人の爲めに之を費し、自分の慰みのみに費すべきではない。

金があつても、費つてならぬ一事がある。即ち、よい身分であるならば、自分の奢侈の爲めに金を費ふことはならぬ。隣近所には、生活の必需品を要する人があるではないか。

併し注意せよ。私は節儉のことはいふけれども吝嗇のことをいふのではない。自分には出來るだけ吝嗇にするがよい。自分の費消を節して、他人に費すのを惜しんでならぬ。

自分としては、衆と共に、出來るだけ生を樂しんだ。狩獵もしたし、ボーローもやつたし、野猪狩りや、鹿狩りも樂しんだ。併し私は、高價の動物をスポートとして買つたことはない。私は仕込まない野馬を小額で買つた。そして自分で之を仕込んで、隨分樂しみも、興味をも得た。或人は價が高いので品物を買ひ、他の人は、そんなことはせぬ。或者は、前の衣服の汚れ目が見えたり、表面が磨滅するやうになると、新しい衣服を買ひ、他の者は、衣服が損ずると、裏返へしをして、二倍ももたせるやうにしてゐる。只に工夫と、節儉とを實行しさへすれば、少しの收入でも、大なる收入と同じ位樂しくやつて行ける方法がある。實にそれは、スポートをする心に俟つてやれるものである。貧乏百萬長者よ。

機會を捕へよ

元私の聯隊の兵士であつた人が、この間私の處にやつて來て、非常に困つてゐることをこぼしてゐた。彼はその生涯の最も善い十年間を忠實に國家の爲めに盡したのであつた。これが國家が彼を遇して、遂に溝に陷れるやり方であるといつた。彼は何等特殊の職業もなかつた。併しカナ

ダにゐる彼の兄弟が、來たら、商賣仲間してもよいといふことであつた。併し彼としては、彼は國家の爲めに盡したのだから、追放されるやうなことは、よいとは思はなかつたし、行かうとしても、旅費がなかつたのだ。

私は、その奉職中に、どれほど貯金をしたかと尋ねた。彼があてこすりのやうに笑つていふのには『一兵卒でいくらたまるものですか』併し私の經驗では、前に兵士であつた大抵の者は、相當に銀行に貯金して置いて、隊を去つたのであつた。そこで私はかういはざるを得なかつた『食事と宿所を與へられ、衣裳や醫者があり、燃料と點燈があり、水は充分あり、そして自分の費用として一日一志六片、即ち一年に廿七磅である。それ故に、八年間に二百十六磅の貯金は、可能であつたであらう。又ビールや煙草や見物をしたとしても、百磅を越えたらうし、利子を加へると、八年間には百五十磅になつたであらう。これでカナダで安定が出來る。而して、カナダは追放の場處ではなく、有望な樂しい國土である。』併して彼は、機會を得た時に、之を利用しなかつた人の一人であつた。この話の教といふのは『太陽が輝いてゐる中に枯草を作れ、後で輝くのを待つてはならぬ。雲が出て天氣が惡くなるかも知れず、雨期になるかも知れない。』である。

ヂョン・グラハムが、その息子にいつた如く『藥を飲む前に匙で遊んではならぬ。易いことを延ばすと、面倒になり、面倒なことを延ばすと、不可能になる……。

ディック翁が常に事を延ばしてゐた。私が前に彼のことを聞いたら、九十三で、死かゝつてゐた。それが十年前のことであつた、未だ生きてゐたら賭をしてもよい。』

全く初めから貯金することは大事だ。特に若くて、達者な時に。バオント氏は、少年給金取りに書を與へて、かういつてゐる。從前職人は、三十歳以上になるまで、給金が段々上つて行つたものであつた。今は十八歳の青年は、よい給金を得て、廿五歳で最上に達し、卅五歳から四十五歳になると、働く力が急に衰へてくる。彼は二十歳で、彼の父よりも多く取つたが、六十になると非常に減少した。

何故に蓄へよといふのか。さて、君は海外領土に行くことが出來たら、得意の日が來るだらう。或は小資本で商賣を始めることが出來よう。併し來るべき、もつと確實なことは何日か、結婚しようとするだらう。君は妻を得て一家を持つことを考へねばならぬだらう。併し、それより以上のものがある。それを、大抵の人は忘れてゐる。子供等が出來る。その時に、彼等を、敎養する

ものがなかつたならば、世間に彼等を出すのに恥づべきことである。

如何にして貯金すべきか

郵便貯金は、何より簡單である。貯金を渡すと郵便局長は、之を受取り、貯金帳を渡して、次々貯金高を記入して呉れる。そして、この金は利子を加へて、段々獨りでに增加して來る。

他の方法は、國民貯金證を、郵便局や銀行で買ふことである。毎週二三の切手を買つて、貯金票に貼つた貯金で之を買ふのである。是等の貯金切手は、爲替郵便局で買ふことが出來る。

他の最も普通な方法は、國民貯金委員法の下に、二三の人と『貯金組合』を作つて、之に加はることである。この方法によれば、他の會員と共に、毎週貯金をして、『單獨貯金』よりも、速かに利子を得るやうになる。

かくして集められた十五志六片毎に銀行に行き、そして直ちに益を得るやうになる。詳細のことは、貯金組合票を求めて、郵便局に行くと、之を得られる。

大きい金額を得た時には、株式や債券に投資することが出來る。それは利益も大きいが、危險

も伴つてゐる。是等に投資するには、この方面の知識を要する。それで專門家の助言を要するのである。併し、國民貯金や、郵便貯金になると、金は絶對に安全で、利子も滿足に得られる。

職業に對する人格

私は善い職業の任命に、人を推薦したことがある。そして、その人の性格の短い記述をしてやつたことがある。そして私がこれを書いた後に、それを讀んで見ると、かういふ事に氣が付いた。若しも誰れかが、雇はうとする人に就いて、短評を要求したりするならば、それは私の與へた短評と同樣なものであるだらう。是等の性格は、多くは雇主が、人に望む處のものと考へるだらう。私のいふのは、是等の點を自分で具備してゐるかと考へることである。さうでなかつたら、急いで之を得るに力めなければならぬ。自分に最も適すると思ふどの方面の職業にも、安全であらう。次のものは彼に付ていつたものである。

『右の者、頗る有能で、勢力家である。如何なる方面にも信頼が出來、工夫に富んでゐる。人を率ゐる手腕があり、――大きい笑をする。この最後のものだけでも、俸給の値打ちがある。物事

が最も困難に見える時に、之をやつて、周圍の者を卷き込むからだ。』

處で、これは、何處へ行つても、充分によい人格である。『有能』とは、その仕事に巧妙、適任を意味する。『勢力家』とは、活動的で、職をたのしむに敏感なるを意味する。『信頼』とは眞面目で、紀律正しく、誠實で、金にも、大事な仕事にも信用が出來、そして馬鹿げたことや、誤りをするやうなことはせず、換言すれば、雇主にも、目下の者にも誠實で、監督があつても、なくても仕事を遂行することを意味する。『工夫に富んでゐる』とは、どんな困難があつても、之を遂行する方法を見出すといふことである。『人を率ゐる手腕がある』とは、丁寧、親切で、自分から先に立つて、人を驅使することをせぬといふことである。その笑ふといふことと、愉快に事をするといふことは、他人にも同樣な感化を與へ、評判には大變價値のある點である。

責　任

或日、我は例の愚頓な、無鐵砲な青年であつた時に、私の聯隊長は、突然私を呼んで、私を聯隊副官にするといふことを告げた。

副官に！。私は驚いた。

副官といふのは、聯隊の氣風、行動の全部が、大部分その人に賴るものである。立派な任務だ。

——併し失敗したならばどうだらう。

私はそれを引き受けることは出來なかつた。

併し聯隊長は、單に、それをなすことを信任すると私にといつただけであつた。處で、二三分たつと、私は別人のやうになつた。私は今度は、大責任を帶びる人であつて、自分の樂しみ以外に、特別の目的のない、無鐵砲な意氣地無しでゐられなかつた。

聯隊の名譽、兵士の向上の爲めに、何をなすべきかといふ大計畫を有し、新しい、眞面目な注意を要する者と思つた。私は精神を込めて私の任務に沒頭した。そして私は決して後を見ることはしなかつた。聯隊長とのこの會見は實際短時間であつたが、これは私の職業の眞の出發點であつた。

そして、その責任に關する教訓から、次々より大なる責任を帶んで、段々高い階梯に進むことが出來た。

自分の職業を得ることに對して、何か爲めになることをしようとするならば、責任を帶びることが出來なければならぬ。

責任を帶び得る爲めには、確信を有し、自分の仕事を知り、責任を實際に行ふことを要する。

海軍では、この事實が、充分に認められてゐて、若い時から之を始める。士官候補生は、その乘組員と共にボートを操縱する責を與へられ、そして、その行動の賞罰の全部に當るのである。

ボーイス・カウトもさうである。班長は、その六人のスカウトの技能、行爲に對する。權威である。ローバースの間の組員もさうである。

早くから、之を實行して、一度、責任を帶びることに慣れると、それが汝を人とならしむるものである。それは汝の人格を高かめ、その職業の上達に適するやうにさせる。

それから、又それが、他人によい影況を與へることになる。

イムララ・バンズ

玆に自分で之を遂行して、成功を得た人の、有益な注意がある。

困難な事には臥てよく狙をつける。
注意　水中の小塊は海馬の頭を表す。

それは大戰に臨んだ、佛國將軍達の最大な一人であつた、フォッヒ元帥から出たことである。

將軍のいふのに『何か仕事をする時には、注意して之を考へよ。

1、汝に要求されることを確實に了解したか、又汝は如何なる結果を得ようと欲するかを吟味せよ。

2、それから之を成功するために計劃を立てよ。

3、その計劃に對する何か善い理由がなければならぬ。

4、その實行に適合せしめるに、己の有する實物を以つてせよ。

5、何より第一に、決意、堅固な意志、成功の最

後まで漕ぎつける決心を持て。』

元帥の言は正しい。自分の小さなやり方では、餘り大切な事でなくとも、前に是等のことを考へるのは、物を計劃するに、常に私の缺點だと思つてゐる。

かういふ缺點から、私はズールー蠻民の間に、『イムララ・バンズといふ名を得た。文字通りでは『臥て鐵砲を打つ人』といふことである。それは鐵砲を放つ前に、先づ以つて、出來るだけ正しい狙をつけるのに注意する人といふことである。それは成功の確かな方法である。『イムララ・バンズ』を標語とせよ。

成功を欲するならば、時々危險を冒すであらう。危險を冒せ、之を避けてはならぬ。併し兩眼を開いて之をするのだ。

この話の序だが、私は曾つて、マタベルランドで、敵の位置を偵察するのに、他の一人と共に出かけて行つたことがあつた。

我々は、夜間に、敵の前哨の通過を企てゝ、夜明けに敵の位置の後方に出た。

我々は敵を捜索して其邊を忍び歩いてゐる中に、遭遇したと思つたのは、痛快な大獅子であつ

た。機會が只では措けなかつた。我々兩人は、馬を素早く走らして、敵にさとられるのも顧みず、發砲した。そして、それを兩人の間に打ち倒した。

併し、間もなく獅子は立ち上り、いらだつて、怖ろしい聲を立てゝ、彈丸で痲痺した後足で立つたのであつた。獅子は駈けることが出來なかつたが、ぐる〳〵廻つて、唸つて方々を見て、我々を搜してゐた。

我々はそれ以上發砲をしなかつた。それは敵が我々を襲ふのを恐れたのと、標本にする皮を損するのを恐れたからであつた。そこで私は乾いた河に下りて行つた。そこに獅子は近か寄つて、休止しようとしてゐたのだ。その間に我の友人は、岸にゐて、獅子が逆捩をくはす場合には、之を擊たうと、鐵砲で狙を定めてゐたのであつた。

獅子が、私の近づくのを見た時に、口を開いて、齒をむき出し、目を怒らして私の方に向いて來た。私は喉に發射して之を殺して了つた。

その時こそ、發見される危險を冒すのであつて、我々は目を見張つてゐた。我々は代り合つて獸の皮を剝いだ。(そして、手袋がないならば、大きな硬い、締りのない皮を剝ぐのに、急いでゐ

る時は、獵師刀がどんなに早く手を赤膚するかは、驚くほどである) 一人が皮を剝ぐと、一人は敵が始終我々を搜してゐるのを感じて、各方面を警戒してゐたのであつた。

我々はさうしたのは幸運であつた。我々は皮を剝ぐと、敵は我々を發見したので、彼等が來る前に、之を束ねて、馬に乘る暇があつたのである。

如何にして職業の準備をなすべきか

曾つて、青年が、其生涯の職業に對して、自分の教育をする時に、如何に方圖を定むべきかといふ計劃を作つたことがある。その目標とすべき諸點は、表的形式で示されたのであつた。(九一頁を見よ。)

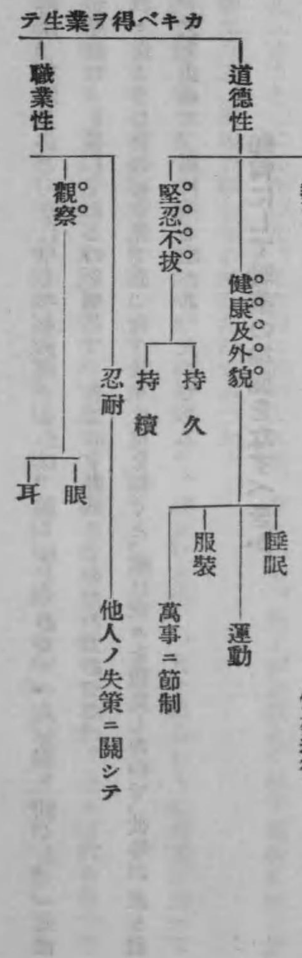
私はその批評を依頼されたことがあつた。そこで私はその第二部として、一の表を附加した。

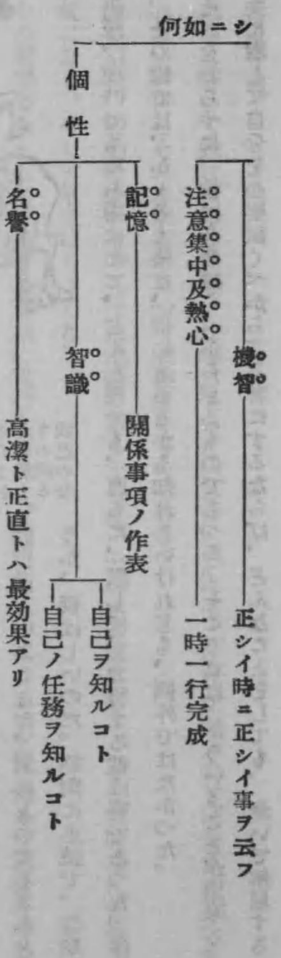
生活法——幸福 {高尚ナ理想——自然研究——其美 / 其驚異——造物主タル神ノ體驗}

奉仕——他人ニ對スル自己犧牲——我々ニ內在スル神性ノ開發

第一部（次表）に關しては、圈點を付したものは皆人格として知らるゝものを構成するものである。そして、それは技能、技術と同樣な人格であつて、職業の成功を期するものである。併し、一方では勢力、一方では練習に特に注意を要するものである。

勢力は大部肉體の好良なる健康から來るが、仕事に對する生來の興味に負ふ處が多い。或者は、少しも仕事に興味を感じないやうに見える。如何となれば、それは甚だしく制限され、絶えず、同樣な溝を行つてゐるやうに見えるからである。





全體の任務完成の爲めに適する處を、觀測し、注目するならば、より好都合なことである。そして目前を見たり、工場、事務所外に出て、使用されるやうになる時の終局の價値を見るならば、より結構なことである。最善の職人は、最も幸福なる者の如く、その仕事を、競技の一種として見てゐる。骨折つて働けば働く程、益々愉快になつて來る。エーチ・ジー・ウエルスは、ワシントンの平和會議に關して、かう書いてゐる。『所謂偉人といふ者は、心は眞の子供であることを、私は認識した。即ち彼等の任務を樂しむ熱心さに於いては、彼等は子供である。彼等は、仕事が好きだ爲めに、仕事をする。かくの如くして、仕事は、彼等には眞の遊技である。子供は大人の父

であるのみならず、彼は大人であつて、それが少しも消滅して居らぬ。』

ラルフ・バーレットは、誠のことをいつてゐる。『遊技は物をなさんとする愛着で、仕事は成す物を所持することである。』

必要缺くべからざる處に、大切なことがある。今朝私が、なぜ、そんなに、私のインド人の僕を賞讃するかと問はれた。その理由は、至極簡單である。彼は主人の事を第一にして、自分の事を第二にしてゐるからだ。――一體自己といふことが、考に入つてくるかどうか、疑はしいのだ。絶對に忠誠で、信用が出來、何時でも持ち場にゐて、どんな用でも、直ちに、默して、力行する彼は實であつた。併し、その國では、かゝる人格は、他にもあるかも知れないけれども、例外ではなかつた。

務は以前のよ。任せるもよ。る信頼信な得る來なり得なりとなすることと右よりの左練訓なるこ成さんの成己の

それを知らずに、彼は必要缺くべからざるものであつた。そこで私は、かういふことが出來る。

雇主に對して自分を必要缺くべからざる者にするならば、どんなことをしても、急いで解雇することはせぬ。

前表に於いて缺けてゐる點は、仕事が早いといふことである。それは勢力の下に含まれるかも知れない。併しそれは練習によつて發達するものである。

汝の遊技、行動に於いて、凡ては迅速であるならば、それは習慣になる。そして同樣に仕事も迅速になり、そして氣受けもよくなる。

その實行の一として、日々の着服に實行して見よ。時間を空費してはならぬ。何もで適當な手の屈く處に置け。そして自分で時間をとり、之を續けて、自分の記錄を作るのだ。

特に注意を要し、この表で、餘り注目されてゐない他の點は、勇氣と快活である。私はこゝで、之を詳說することを試みない。併し、ピー・ピー・バレンタイン氏の『老主人』に述べた言で、之を總括しようと思ふ。それは、この章の九七頁に述べてある。そして、汝の身上を作る、も一つの財產となるものは希望である。自分が低く出發したから、出世は不可能だと考へてはならぬ。今日の何百といふ大人物は、梯子段の最下から出世したのである。併し、前にも述べたやうに、自分の昇進は、自分ですべきである。他人が膠着してゐるからといつて、泥の中に停止して居つてはな

らぬ。自分の踏み段を見よ。そして進路を見出すのだ。最下の梯子段に足を置け、そして登つて行け。

成功に必要な要件を持つて、自分がよくなつた人は、澤山にあることを見てゐる。それが進んで行つても、忍耐が足りないので失敗してゐる。物事が思ふやうにならないといつてやめて了つて、そして又何かやつて見るのだ。そして、一度やめて、又他のを試みるのが習慣になると、習慣は何時までも、習慣になつてゐて、生涯中止が連續し、そして決して向上することがない。

表の第二部は如何に生活すべきかに關しては、即ち如何にして、只の愉快ではなく、眞の幸福を得て生を樂しむかといふことであるが、それは生活を得る問題と、等しく重大なことである。私は之を二部に分つてあるが、殆んど互に同樣に重要なことで、即ち高尙な理想と、他人への奉仕とを含んでゐる。併し、他人に奉仕することは、二つの内でも、最も重要なことである。なぜなれば、それは廣大な理想を含んでゐて、幸福への、大階梯であるからだ。

これは、他の章で、私が詳說しようとする處である。

馬の感性

慾心が入ると、正直が出て行く。

掌中の一磅は、馬では二磅の値打ちがある。

四角な杭なら、四角な穴を作り、之に達するまでは滿足してはならぬ。

衣服には、問題と同樣に、その二面がある。之を着終るまでは、兩面を利用しなければならぬ。

仕事は、どうしたら遊技になるか。『遊技は物をなさんとする愛着で、仕事は成す物を所持することである。』(アール・バーレット)

死ぬ時は、誰れでも悲しむやうに暮らせ。葬儀屋でも。(マーク・トウイン)

皆が幸福に暮らし、金を借りてしても、收入内で生活しようではないか。(アーテマス・ワード)

大抵の惡事は、發汗を抑へるからだ。(ドーソン博士)

自尊、自讃、自制

この三者のみは、人生を王權に導く。(テニソン)

笑つてゐよ

ひどい悲しみや、腹の痛みを感ずる時、

そして、醫者が、刀物を持つて、手術をする時、

彼は、お前を手術臺にのせて、側に立つてゐる時、

彼は、お前の皮を切るために、チク〳〵やつてゐる——

その時に、手足をついて、坐つてゐる袋鼠の事を思へ

鐵砲は向けられ、犬はついてゐる。

どんなに獵師に叫び、どんなに犬に叫ぶか

『私は笑つてゐよう——お前が私を打倒すと思つても』

(『老主人』ビー・ビー・バレンタイン作)

參考書

The Facts of Gambling. By J. M. Hooge (Melrose), 2s.

Mountain Craft. By G. W. Young (Methuen)

Talks to Boys and Men in the Making. By James Bogan (Scott), 2s. 6d.

The Big Business of Life. By Ralph Parlette.

Value for Money. By Sir W. Schooling (Pitman).

第二 暗礁

酒

酒

この暗礁の暗黑面は、放縱によつて、自己の眞の幸福を破壞する誘惑である。
光明面は、欲望を制して、人格を涵養し、人生の高尙なる快樂を得る事實である

放　縱。

一杯の酒は愉快である。食間の一杯は、危險な贅澤である。
交際の誘惑は、飲酒の初歩に導く。
獨酌する者は、浪費者になる。
飲酒者は、國家の危險物である。
人格者よりなる國民には、禁酒を要しない。
模範の力。

喫煙も過ぎれば、健康を害す。次に掲ぐるものも亦放縱に屬する。

過食

過眠

過勞

肉體の强壯なる者は、自制と長命とを得る。
罵詈は、人格修養の足らない證據である。
克己。
人格の修養は、放縱の解毒劑である。
乃木將軍の例。
自制は、人格涵養の最大要目である。
習慣及思想は、統御できる。

自己に對する忠誠は、他人に對する忠誠と等しく、人格陶冶に重要である。

自尊は、他人の尊敬を得る。

恥は人を浮浪人にする。

自己暗示は、放縱の誘惑を救ふ。

如何にして、トミー・トムキンスは、死に勝つたか。

他人の格言。

誘惑を一掃せよ。

酒

「酒か?」

ヤーバース大佐は、決して、酒か、アルコールの種類を離さうともしなかつた。或機會に、液體が得られない時には、何か工業用のものを飲んだ。醫者が『併し、水が得られないといふことですか』と彼にいつた。

大佐の答へるのに『あなた。あなたは、ほんとうに、喉が喝いた經驗がないのです。さうでなかつたら、洗濯などを考へてゐる時でないのです。』

第三杯目

酒か? 私はよい酒を一杯飲むのが好きだ。—— その匂、その色と氣分。

又その代りに、ビールか、サイダーなら一杯飲むのが好きだ。兎に角二杯目は、私には一杯目ほどではない。風味に新し味もなく、舌ざはりも、さほどではない。

三杯目になると、賢しい人なら「コップの中に毒」があることを知つてゐる。液中に含有する砂糖や藥品は、途にはよいことがない。例へば、葡萄酒は痛風を起すやうに、ビールは少しでも、斑點が出ることを知つてゐる人は少いやうに思はれる。

運動や、競走に適しないやうにするのは、三杯目――二杯目とは云はないが――である。それだから、若い人は、氣を付けなければならぬ。

私の聯隊では、將校や下士には、命令よりも、模範を示す主義でやつてゐた。この主義で行くと、軍曹の一二の者は、餘り腹がふとつてゐて、機敏に馬の乘り、範を、兵に示すことは出來なかつた。

そこで私は、將校下士で、太いが爲めに、機敏でない者は、三ケ月内に、その位置を失ふかも知れないといふことを、警告したのであつたが、さうすると、餘計な脂肪組織を減ずるのに好果を得た。

併し私の講評は、組織的であつて、この術は、日々運動を少し多くし、ビールを思ひ切つて少くすると、その目的を達するだらうと注意したのであつた。

肥滿の原因――肥滿の結果

其結果は驚くべきほどであつて、全然滿足であつた。害を與へたのは、その三杯目であつた。併し三杯目が、これよりも悪いことには、それが四杯になり、五杯になり、「六ツペエー」になり、それから面倒が起り、呑んだくれて、電柱に取り付いて「今日はクリスマスかピカディリーか」ときくやうになる。

食間の一杯

私は驚くべき有能な機關師を知つてゐる。實際天才的であつた。彼は「二十分男」といつたやうな者でなかつたら、遲れることもなし、早過ぎることもないのであつた。即ち彼は、二十分間經つと一杯やるので、それが、それが私の若い時分の、米國老提督のことを思ひ起させる。その人は、私が何か一杯を献ずる

と『イエ、有りがたう。私は飲酒と飲酒との間にはいただきません』といつた。

それが私の述べた、食間の一杯は、害をなすといふ説になるのだ。食事の時にのみ飲酒すると決して泥醉するやうなことはなく、確かに二倍の健康が得られよう。

再び私の聯隊に立ち戻つていふと(『私又は私の聯隊』といふことは、この本を讀み終らない中に隨分あき〳〵することだらう。併し私は、是等の『暗礁』の間を漕いだ、實際の經驗談をしようと思ふのであるから、容赦を願はなければならぬ。)私は、他の規定があつても、聯隊の慣習であつた遲い夕食や、中食の時にビールを用ゐることを兵士に許したのであつた。

その結果として、酒保で飲酒する者が、非常に減少して了つた。それで酒保に入る者が一人もなくて、休日同様の日もあつたので、酒保の給仕に、白い手袋を贈物としなければならない場合もあつたほどである。

交驩の誘惑は初歩

或る好意を有する人が、或るのんだくれの、悪い癖を直して、善い人にしようと、試みて居つ

たのだが、辛鼻が之を遮つていふのには、『君は醉うたことがないやうなことをいつてゐる。』

『よつぱらひか？　私はそんなことはしたくないと思ふ。』

『それで、何が解るものですか。私にいつて下さるな。行つて、醉漢になつて、その誘惑と面白味とを知つてごらんなさい。それからお話をなさい。』

處で、それには誘惑が隨分ある。特にその連中に加はるならば。飲酒をする者の大半は、他の多くの者と、交際したり、仲間にならうとして、遂に引き込まれる。初めて世間に出た青年は、他人のするやうなことをして、その仲間『青二才の一人』になつたことを見せようと思ふ。

十中の九は、その理由で煙草を飲み始める。大抵は虚威張からだ。

例へば、少年が、農場で育つたとする。そこでは、酒も煙草も、欲いと思ひば、不自由がないのであるが、大人には禁酒、禁煙の者があり、少年には、自ら進んで、之を口にする者があらうとは思はぬ。兩者共に、初めての者には不味いし、之を飲んでゐる者も、大抵は『他人がしてゐるから』といふ位の事である。

そして、卓を圍んで一處になつてゐるのに、酒も飲まず、之を斷るといふのは、非常に困難な

ことである。そして、遂に『バッベエー』になり、元氣にもなれば、喧嘩にもなるのだ。

元氣がよかつたり、時々喧嘩する位は、善いこともあるから、私は反對はしない。是等は、アルコールがなくとも、青年には自然のことだ。自分も、之を最も樂しみとしたし、或る度までは今考へると、耻しいと思ふやうな馬鹿なこともした。それが大人になる青年の性質だと思ふのだ。

『ボスポラスの兄弟跳び』といふ遊技を、私が曾つてしたことがあるやうに思ふ。それを御存じですか。

室内の道具をピラミット型に積むのだ。椅子の脚は、勝手に上方に向け、その前に、丈夫な机を置く。それから各競爭者は、順番に机の方に駈けて行き、その上に頭をついて、でんぐり返りをし、ピラミットの上に登り、『私はボスポラスの跳びつこの兄弟だ』といふのを忘れずに叫ぶのである。

今になつて見ると、一體何が面白いのか解らないが、その時分には、そんなことをしたのである。併し、それは若い者の馬鹿な處である。

『跳びつこの兄弟』になるのの面白味は、酒を飲んで浮れる喜びとは、全く異つてゐる。だから

跳びつこの兄弟

飲酒は、青年の歡樂に必要なものではない。實際酒がなくとも、これと同樣に騷いだり、又それ以上のことも出來るのである。

獨酌する者は浪費者である

交驩は別問題とするも、飲酒の誘惑には、最も強い個人の惑溺がある。それは自分の心や境遇の悲哀を『酒杯の中に流して』之を忘れやうとすることである。

商賣の打ち續いた失敗、不健康や失望の打擊、不幸な家庭や單調な境遇、是等は凡て人を酒中の仙境に陷れ易い。併し、それはよい事ではない。大酒家がかういふかも知れない『話すことは結構だが、どうすればよいのか。結局よい逃げ途であり、滿足の一種を與へ、短時間でも、鬱散になるならば、何故に杯を傾けしめないのか。』

處でこの反對說は、心身の破滅となり、廢物にするばかりだ。意志の統一を失ひ、勢力を消耗する。しかも、この二點は『人格』の要素ではないか。

一度飲酒の癖がつき、又はこれと等しい惡癖たる麻醉劑常用癖がつくと、この世に於ける幸福の機會は終りを告げる。健康は害し、仕事の能力は減退し、人格の弱點に付け込んで來る他の誘惑には陷り、劣惡、罪過に身を下し、何の取りえもなくなる。

遂には、酒浸しに下落して、浪費、流浪の身となり、死來りて、寂滅する。

國家の危難

人格を有する意志の强い者は、群衆に卷き込まれることはせず。止める時を知つてゐる。群衆に加つて、之にかつがれ、罪惡に赴く者は、愚人のすることである。彼等は『苦海に對して腕まくり』する勇氣を持たないのである。

是等の者の多い處――そして、貧民窟の居酒屋に、それがない處はない――に範例が擴がると、それが群衆病になる。それが、人口の割合に、健康、殖産の力が減退し、氣力も消滅し、か

くの如くして、全體としての一般幸福と繁榮とが低下する。

それは家庭を悲慘な貧民窟にするのであるが、之に對しては男子に責任がある。それは各自の自重心と、男性と、思考心を破壞し、――一言にして、人格を失ふのである。

國家の危難とはこれである。

無分別な薄志弱行の徒を多く有する社會は、やゝもすれば、煽動者の無謀な計畫の餌食となるので、彼等は鼻先で、かゝる群衆をあやづる。

强大な國民を造るのには、之を構成するのに、人格を有する國民を有たなければならぬ。

禁止は人格を有する國民に必要なし

或國では、國家のこの危難が認められ、全然酒を制止する禁止令が設けられてゐる。飲酒がもたらす繁榮の消失と、金と時と健康の驚くべき消耗とを考へると、大酒家の外は、この誘惑を驅除することに一致しない人はない。けれども、如何にして之を爲すべきかといふ方法に關しては全部一致を見るに至らないのである。

マホメット教國では、國民の大衆を擁する宗教で抑制されてゐる。或國では法令で、之れが粉碎されてゐる。この最惡な點は、國民の多くを率ゐて、法令を潛るやうにすることである。

これは勿論新青年が生長して、誘惑に陷らぬやうになると、影もなくなるであらう。併し、或る程度の損害をしてゐる。それといふのは、一方で法律を破るといふことは、恐らく、他方に於て、之を無視することを奬勵するやうになるからだ。

併し、禁止令は、主として、內から自己の改善を計らうとする人の自由、獨立の考に反することになり、如何に善意でも、外から禁止運動者によつて、改善されるのを怒るやうになる。

最近ロバート・スタウト卿が、酒は無くても、結構行ける贅澤品だと述べた時に、ガウント孃は『さうです。私は出來ると思ひますが、ボルシエビストが、寢卷は不必要な贅澤品だと考へるのと、丁度同じことです。』と答へた。

改善は行はれやう。しかも非常な効果を收めて行はれつゝあると私は信じてゐる。そして、多くの國では、國民自身の自尊心、人格によつて、非常な權威を以つて行はれてゐる。

子供のやうに命令が出來るものではない。併し、仕事や、遊技をする者には、適しないし、男

らしくもないことが解り、生を樂しむのに、他にいくらも方法があることを知つたならば、人は過度に飲酒をするやうな馬鹿げたことはしないだらう。

人が自己の生涯の數年前を回顧したならば、非常な大變化のあることを感ずるだらう。

私が初めて、軍隊に入つた時に、兵士も、將校でさへも、祭日などに泥醉して、そんなことは何も考へないといふのは、全く普通のことであつた。今日では、將校が或る程度を越えると、善い聯隊では『どうもならん』とかなり强くいはれ、酒氣でも帶びてゐると、追ひ出されることもある。

近頃になつては、聯隊が海外領土の勤務の爲めに乘船などする時は、各員が眞面で參加し、恰も日常の練兵に出かけるやうである。それが數年前であつたら、多くの者が缺席をし、參加する者の半數は、擔がれないでも、人に扶けられて、汽車に乘つたり、汽船に乘つたりしたものである。

工業都市の土曜日の夜は、往來は喧嘩するのんだくれで一杯であつたものだが、今では樂しい世間並の人で通常の群衆と異る處がない。人格が向上し、周圍が改善されて効果を得てゐるので

あるが、猶改善の廣野があるのである。

私は若い公民の青年に信頼してゐる。大戰は、人生のより眞面目な方面に、諸君青年の眼を開かせたのである。

諸君には野心がある。諸君は男らしい者にならうと思ひ、人生の業務たると、競技たると、社會の奉仕たるとを問はず、成功した任務に適する人たらんことを欲してゐる。諸君がこれに成功せんとするならば、時と金と健康とを消耗する飲酒が、何等の役に立たぬことが解るだらう。

誓約するのは一歩である。併しそれは、弱い人格者の只の一手段である。意志の强い者は、自分で之を律するのである——即ち誘惑が來るとも、之に反抗して立ち、その暴戾に對して自由を確保しなければならぬ。

禁止令は、人格ある國民に對しては、必要のないことであらう。新時代の青年は、更生の途を開拓しなければならぬ。

模範の力

私は正直な卒直な外界の批評意見に對して、大いに敬意を表する者である。そして私は、アフリカ、太平洋諸島の文明の開けない野蠻人が、人の欲する卒直、正直な批評家だと思ひ、人格の大變によい批判者だと思つてゐる。

この兩者の、國民間に、同じ批評が公言されてゐるのを聞いたことがある。『白人の英人が我々に支拂をするといつたら、我々は物資を與へる。彼は之を拂ふ。併し白人は皆さうとは行かぬ。』

それは我等の有する聲價である。そして、それは我々の維持すべき筈のものである。

併し『白人の英人』でさへも、如何なる場合に於いても、見本通りに行くといふのではあるまい。そして、それは我宣教師が、充分重荷を負ふ處である。

數年前に、スワズの老后が、我々に話をしたのを記憶してゐる。その宣教師の來たことや、老后とその人民に、基督教の祝福を說明したことや、又その仁慈の感化によつて、人々は、その商賈の總てに、正直で、正確なことや、眞面目で信用のあることや、他人に對して、仁慈で援助することを話したのであつた。

そこで、老后の人民は、白人の商人や、移住者の到着を歡迎し、そして土地も貸したり、家を

立てる援助をしてやつた。

それから、その人々は、他人に感謝し、援助もせずに、却つて自分共を援助することを發見した。彼等は土地の家畜を取つたり、支拂を約束して、一錢も拂はずに、蹴飛ばすことさへした。彼等は、自分共の使用にウヰスキーをどん〳〵輸入し、土人の爲めにはジン酒を輸入した。

模範の力。スワズ女王。
宣教師は節酒を說教する、併し白人は飲酒を實行する。我々は宣教師を支持する併しあなたは自分の前でジン酒の只一例を與へることが出來ませんか。

老后の武士共は、國民を激く破壞者を殺す許可を求め、老后も之に傾いたことを我々に話したのであつた。老后は、今は或る一事を說教して、その反對を行ふ宗教を信用して居らぬ。

我々は老后に同情せざるを得なかつた。併し、多分之を仕過ぎたのであつたらう。といふのは

老后が我々の處を去るに臨んで、我々にふり向いて、眞にさう感ずるかどうか、之を知らんことを望んだのであつた。そして、我々は奮然として、これを斷言した時に、ジン酒の例を出して、我々の言葉を履行することを、我々に依頼したのであつた。かゝることは、模範の力である。

喫　煙

私は飲酒に關して少しく書いた。なぜなれば、罪惡、疾病、悲慘の原因を、頗る多く作つたからである。それ故に、個人、國家の兩者に對して、最大危難である。そして、我々は世間に出て、幸福、成功を求めようとしたならば、それは、斷々乎として避くべき暗礁である。

併し、自己耽溺の他の形式がある。これも亦青年の警戒を要するものである。その理由は、幸福を得る重荷となるからである。

それは青年に對する危害である。生長最中の青年に對して、煙草には、毒もあり、他の害もあることを、私が絶えず與へた警告を感謝して、青年及その兩親から受けた手紙が、どんなに澤山あるか驚くべきほどである。

こゝに、この問題に關する最近の覺え書の一つがある。

或る者は、私に問うていふのに、『スカウトに喫煙を禁ずる命令はどんなことですか。』私の答はかうであつた。少しも命令はない。併し、スカウトは誰でも、喫煙する青年は馬鹿だと云ふことを知つてゐる。そして、我々は、この運動に『スカウトは馬鹿でない。』といふ了解を持つてゐるのだ。

何故に、喫煙する青年は、當然馬鹿であるか。私は、『スカウティング・フォーア・ボーイス』の一章に、その理由を擧げてゐる。その理由の一は、かうである。

『青年が、充分發育を終らぬ中に、喫煙すると。大概心臟を弱くすることは確かである。しかも心臟は、人體の最も重要な機關である。それは、肉と、骨と、筋とを作る爲めに、全身に血液を送るポンプである。心臟がその仕事をしないならば、身體は、强健になれよう筈がない。

『誰れでも、それが好きだから喫煙を始める者がない。最初は嫌である。併し、男らしく見せようと思つて、えらがる處からするのであるが、實は小さき馬鹿者に見えるだけである。』

私は勞働者の見地から、この問題を研究した人から、手紙を得たのであるが、そのいふ處によ

ると『現代青年の不滿、怠慢、無氣力なる者の半數以上は、過度の喫煙、特に卷煙草を吸ふのに原因してゐる。

『若しも、彼等は、二十歳以上になるまで、喫煙も、飲酒もしないやうに、納得するならば、より善良な男子が得られよう。生長最中の者が喫煙すると殆んど如何なる青年でも、不滿、怠慢であり、定職をも得ず、感興も、希望もなく、神經質で、勇氣もないといふことを、證言することが出來る。

『これは現代に於いて、國家の苦しむ處で、青年勞働者の間に失業の起るのは、殆んど全部、こゝに原因があるであらう。

『私の諸君に告げようとする處のものは、自己の爲めにも、喫煙はするものでないといふ理由がこゝにあるのである。』

併し、喫煙に反對する他の理由は、成熟期の大人でさへも、その大多數の者は、之を忘れてゐるのであるが、それは、喫煙はどれほど、他人に影況するかといふことである。

煙管に火を付けようとする時（卷煙草に關して何等の考もないが――それは、婦人、少年の吸ふものだが）室や、汽車といふやうな處にゐる場合には、先づ第一に近處の人を困らせないことを確めることである。

多くの男、大抵の女は、煙草を吸ふことを嫌がる。特に、喫煙者と一處になつて、匂が衣裳に着くのをいやがる。それに反對をいふのを避けるのが自然だから、嫌なのを默つて我慢してゐなければならぬ。少し義氣のある人なら、もつと都合のよい機會を待つて、煙管を手にするだらう。

卷煙草は、落着がない輕薄な人の群れが吸ふものだと、私には思はれ、煙管では、靜かに物を考へて、靜かに吸ふやうな人がすると思つてゐる。

安いから、卷煙草を吸ふならば、安い物は、悪い物で作ることを考へなければならぬ。

煙草商がこれに付いていつたことがある。

『卷煙草十本に拂ふ六片毎に、約二片半は、税金として政府に、約一片半は小賣商に行く。殘りの二片は、製造者が、煙草の原料と、刻み賃、製造、荷造、運搬、廣告、手數料に拂はなければ

下司下郎は車内をくすぼらす。

たらぬ。それでも、まだ利益がある。』

私は煙草を少々吸つた。それは刻みであつた。私は、アメリカ土人との戰に、斥候任務に當つた米人と一處になつた時のことであつた。

彼等は誰も煙草を吸はぬので、男らしく見せやうと私が吸つてゐるのを見て、大樣に私を笑つて、初心者だといつたのであつた。彼等は、喫煙は視力や、肺や、嗅覺にはかたきになりがちだことを說明し、そして嗅覺は、夜間の作業には、斥候には貴重なものであることを說明したのであつた。そこで、私は、その時、その場で喫煙を止めて了つた。そして二度と之を手にしたことはない。それで、健康上には非常によく、禁煙の爲めに、財布の都合も、確かに具

合がよい。

過　食

私はメーフキングにゐた時に、我々は皆一日の口糧を非常に減少して生活しなければならなかつた。そして守備隊の各種の人々に、どう影況したかを見ると興味あることであつた。それが、著しく各方面に影況を與へたのであつた。或る者は平常と異る處がなく、多くは見かけは減少し、そして一二の者は、肥つたと私は信じてゐる。併し、七ヶ月經つて、敵に對する逆襲をするために、志望者を募つた時に、その試驗は表はれたのであつた。私は五哩進軍の出來る自信がある者を募つた。すると各員は、之に加はることを希望したのであつたが、その極少數の者だけが、この輕微な試驗でさへも耐へることが出來ることを、間もなく發見したのであつた。併し、要求された任務をなし得る者は、食事も、飲酒も、喫煙も、凡て節制を守つた者であることは、十分明瞭であつた。

同じ結果は、普通『白人塚』として知られてゐる地方のアシャンテイの沼澤、森林地を通過して

アフリカ西部海岸の遠征に參加した時に發見されたのであつた。平常安樂に暮してゐる兵は九柱戲のやうに倒れ、生き殘つた者は、節制家で活動家であつた。その遠征で、偶然にも、肉類は、人の食物の必要な部分でないことを發見した。長い間私は、バナナと甘蔗だけで生活し、太陽の光も見ることの稀れな、深い濕氣の多い森林に埋まり、濕地の植物腐蝕の爲めに、腐つた玉菜のやうな嗅のする中に居つたけれども、私は一生涯これほど强壯なことはなく、腹は細くとも、氣が輕く、一日平均二十哩の進軍をした。

過　眠

過眠は他の放縱であるが、人は餘り考に置いてゐない。併し、日本人は、腦と四肢の勢力を休養するに要する以外の、睡眠一時間毎に、有害が加はり、脂肪肥大を增進するといふ原理を守つてゐる。故に肥り過ぎると思ふ人は、毎晩睡眠一時間を減じ、之れと反對に、痩せ過ぎると思ふ人は、十分つや〳〵するまで、二三週間一二時間多く眠ればよい。身體の休養を欲する者は、良書を讀み、心の休養を要する者は、フットボールをするか、釣に行けばよい。

過言

他の最も普通な放縱の形式は、大分ありがちなことだが、惡口をいふことである。なぜなればそれは自制心の缺乏を示し、そして一時は、感情を輕減するけれども、(自分でも、さう思つてゐるが)自由の手綱を許すほど、益々惡くなりがちな弱點を、減ずるものではない。それは自分の爲めには、何等の善いこともなく、他人に對して用ゐられると、害をなすものである。他人には惡感を起させ、そして、如何なる場合でも、自己の威嚴を失ふものである。ベット・リッチは、惡口は使ひ損で、大事な時には、しまつて置くべきものだといつてゐる。ナポレオンが、その最も有望な統率者たる

士兵く吐を口惡

ランネ將軍の事をいつたことがある。ランネ位の者は、偉い武人の質は備へてゐるが、その部將を叱る短氣が勝ち過ぎるから、偉らくは決してなれないだらう。それは將軍にありさうな誤の最も大きい一つだと私は思ふ。」

これはランネが、その親友で、ナポレオンの副官であつたマルボー將軍から、密かに告げられた處であつた。ランネは良將たらんことを熱望し、その日から、自ら戒めて自分の氣質と言葉の自制をし、遂に昇進して、佛國の元帥とまでなつた。

業務に於いて、この過失を知らぬために、昇進仕損つたランネは幾人あるか知れない。暴言する者は、進まんとしても、決して人の長たる望みがない。

過勞は、或る種の人の陷る放縱の他の形式である。

或る種の人で、凡ての人といふのではない。

この書の出版者ハーバート・ジェンキンスは、或る種の人の一人である。私は目下彼の手記を持つてゐる。それにいふのに、彼は只今一日十三時間働いてゐて、一晩として、ロンドンから出られることはない。只今のことである。私は數年來彼を知つてゐるが、この然らざることを記憶し

てゐない。彼は常に一日十三時間働いてゐる。

最近新聞紙で、この國で、最も多忙な三人物といふ問題で、募集してゐるといふことを聞いて少しく面白く感じた。そして、私は、ロイド・ジョージ氏や、プリンス・オブ・ウエールスと、同格に認められて居つた。

かゝる過當の賞讃には、私の帽子位にしか當らないのである（實際それ以下である。なぜなれば、私の帽子は戰後價額で、その時分には定期時間外のことを澤山したからである。）

實は私はこれを、酷冬の朝五時十五分に書いてゐる。併し、私は、生きてゐる中に、早く起きないと、半分の愉快も、決して得られないからである。

毎日一時間餘分に仕事をすると、一年に、三百六十五時間、即ち近所の普通の人よりも、三週間餘計に、起きてゐる時を得る譯である。

一身上のこととしては、私は毎年十二ヶ月の處に、十三ケ月生きてゐる計算になる。或る人は心身疲れてゐるのに、その日の終りに餘分の時間を置く人がある。仕事を仕終せるのに、朝早いのに比べると何でもない。

仕事に得意になつてゐる人は、それによつて、大なる愉快が得られる。

或る時、私は、ストライキをやつてゐるのに、仕事をしてゐる若い機關師と話したことがある。どうして、そんなに仕事をするかときくと、無理もない得意氣をしていふのに『エイ、あの仕事をご覽んなさい。粋ではないですか。私はあの儘にして置けないのです。』

彼は仕事が大事だから、それにくつついてゐたのだ。仕事

泥になる仕事だなそうじやないか。兄弟。

が好きで働いたら、どんな相違になるだらう。

只危險なことは、餘り熱心な仕事師は、仕事の奴隷になつて、適當な保養も、休養も得られぬことである。休養といふのは、怠惰といふことではなく、仕事の轉換といふことである。

自分の仕事の轉換は、大部普通とは違つてゐる。先週水草を取除くために、泥水の流を渉ることゝしたことがある。その仕事は私には面白かつた。併し尙ほ面白かつたことは、浮浪人は橋の欄干に坐つてゐて、煙草をふかして、私の働くのを、熱心に面白がつて、見てゐたことであつた。

ロンドンの忙しい往來で、よく集る群衆の興味をご存じでせう。そして往來に、黒汁で印をつけてゐる人を見たでせう。彼は、それであつたのだ。

遂に好奇心を滿足させたと見えて。『見た處では、泥になる仕事だなア』と小さな聲でいつた。私はさうだといつた。足も顏も、泥だらけにならざるを得なかつた。

『兄弟。それで幾何になるかね。』

『一時間六片にもならんよ。』私は答へた。

『とんでもない。私はそんなことをしたら、目玉がとんで了ふ。』

私は彼のいふのを疑はなかつた。

健康は自制を助ける

私は曾つて、兵士の裝具の一部、即ち水筒を持たずに、出かけた一隊を指揮したことがあつた。それは慘酷に聞える。最初は、兵士もさう思つてゐた。併し、體が之になれるに從つて、水が少しもいらんといふことが解り、重い物を腰にぶらさげるにも及ばず、他の隊よりは、三倍の行軍が出來た。

その上、他隊のやうに、下痢にも、チブスにも罹らなかつた。その理由は、最初一時間も行軍すると、水筒を持つてゐれば、これを飲んで、空にして了ふのであつた。

かういふ風にして、腹をがぶ〳〵にした後には、喝が前よりも增して來て、流れでも、水溜りでも、見付かり次第、水筒に汲み入れる。それで、病氣にも罹れば、健康をも害する。

どんな液體でも、特に酒精は、食間にこれを飲めば、體に惡い。競走や拳闘を練習する人は、

體具合をよくしやうとすれば、酒精は食事の時に、極少量をとるだけで、それでさへも、大した効能がない。

喝を大して感じないのは、『具合のよい』證據の一つである。フヴトボールや、他の運動に、體を鍛へてゐる人は、さうでなくては、いけないのだ。仕事をしてゐる時に、之を忘れてゐるやうに見える人は、給料も、昇進もよい。如何なる時でも、體の具合をよくして置く人は、仕事も人並の二倍、愉快も二倍に得られる。

食間の一杯を口にせず、注意をしてゐる人は、百歳の齢を保てよう。

ジョン・シエル叔父さん

『昨年、ジョン・シエル叔父さんは、亡妻を弔ふために歸國した。夫人の親戚は、葬儀一切の世話をし、七ツになる小さな子供を引き取ることに決定した。ジョン叔父さんは、强硬に抗議したけれども、子供を渡さなかつた。そこで、ジョン叔父さんは、家に入つて行つて、百年以前に自分で造つた、古い元込銃をとつて、驟馬に跨り、これを追つかけて行つた。途上で舅に追付き、そ

の銃で子供を渡せと迫つた。

『百三十二歳——硬骨である。』

然り。誤植ではない。『ランドマーク』の發表した、信ずべき話によれば、ジョン・シエル老は、千七百八十八年、九月三日にノックスビルに生れ、現に生きてゐて、元氣である。そして上述のことは、昨年やつた最近の事蹟である。その時に述べた子供は、只七歳であるが、長男は九十歳以上になり、その間には、二十七人の子供がある。長男は農夫で、長命の秘訣を與へてゐる。

『骨折つて働け、けれども働き過ぎてはならぬ。働き過ぎるのも善くないし、働き足らぬのも惡い。體が要するだけ食べて、眠り、そして毎日少し娯樂を持つのだ。』

併し、彼は、水より强い物は、何も飲んだことはない。

娯　樂

事務所か、委員會に仕事があつて、一日餘り長く居た時には、私の時々やる『娯樂』の小さな形式は、——どうか人にはいはないで下さい——興行物や、活動に行くのだ。

立派な人は、これを甚だしい名譽失墜といふだらうと思つてゐる。けれども止むを得ない。誰れでも完成にはなれない。

私は最も善い休養として、仕事の活動的變換を力說した。この他人のやる娛樂を受け身になつて、時々まぐれ込むのに對しては、私は何等の辯護も持たない。

活動に入ると、眼前に繪になつた物語を見て、樂な半睡の狀態になつて了ひ、時々ある下劣な話になると、全く眠つて了ふ。

興行物になると、自轉車旅行者や、皿投げのチヤンピオンや、跳ね返へるネツクタイを着けた者のあるのを好きだ。一場の笑は、私には腦の洗濯になるやうだ。

同時に、金切り聲の、半裸體の婦人の大獨唱家や、魚臭い、酒臭い姑の地獄のやうな、陳腐な古い話や、滑稽家の資格もなく、人を笑せることも出來ない俳優の、言葉を入れた、きたない話になると、四分の三も見ない中に、全くうんざりすることを、否認しない。

それが上品な娛樂であつたら、見物人も一層好きになるだらうし、興行して一層利益にもなるだらうと、私は思つてゐる。

實際婦人は、今では興行物を見るに來られるが、數年前であつたら、その使ふ言葉や、下品な歌の爲めに、婦人には出來ないことであつた。

其他澤山の弱點や、放縱な例は多いのであるが、こゝでは述べない。併し、注意して自分の人格や、習慣を吟味して見たら、これを發見をすることが出來よう。その多くは、これまで、氣が付かないでゐたかも知れない。併し、他人に指摘されるのをまたずに、自分でこれを發見した時に已にこれが匡正の途にあるものと思ふであらう。

前章には、その二三の例と、その解毒劑とを揭げたに過ぎない。

この暗礁の廻避法

正しい道を食ひ切る『酒』と銘を打つた暗礁は、實は『放縱』であることが解る。といふのは、過飲、過煙、過食又は奢侈の如何なるものでも、人を持ち逃げる傾向があるといふのだ。放縱は個人の破滅を來し、社會には害毒を流す。それは、危險に背を向けて、周圍の群衆と共に漂流する結果である。併し、前方を見て、自制を以つて、自分の舟を、自分で漕ぐと、安全に、その暗礁

の日當りのよい方面に、廻航することが出來る。これによつて、弱點への誘惑に對抗する保證を與へる人格を强固にすることが出來る。

かくの如くして、成功の途に上る助けとなる。

自　　制

人格を涵養する要素は色々ある。私の考へてゐる人格とは、人を人間にし、又は一層進んで、紳士にすることである。

その中で第一のものは、自制である。自己及び、その怒り、その恐れ、その誘惑――良心と、廉耻心の外は、實際何でも――を自制することの出來る人は、紳士となる途に、立派に就いてゐる人である。

『紳士』とは、スパッツを著け、眼鏡をかけ、金のあるハイカラの意味ではない。併し、『白人』とは、どんな困難に遇つても、直進して、その名譽に信賴出來る、義俠に富み、賴みとなる者のことである。

自制、この點は、一般に英國人の特に强いとする處である。實際我々は、我々の感情をかくす傾向がある。それで、外國人から見ると、私等は屢々不注意、不親切と思はれるのであるが、一旦事がある時は、落著いてゐて信賴出來ると思はれてゐる。

處で、それは、凡て事のある時分に要するものであつて、我々は、自制によつて、多くなし得ると信じてゐる。それは確かに、多くの誘惑に對して、立派に成功せしめるものである。

それは、人格を涵養しようと思ふ者の、修養することが出來、又修養すべき筈のものである。

少年が困難や、危險、苦痛などに陷つた時には、力めて笑ひ、又は口笛を吹くと、直ちに氣を持ち直すといふスカウトの掟を、嘲笑するものが往々ある。

けれども、一度これを自分で試みた時には、その考をなるほどと思はぬ人はない。

それは疑もなく、望むだけの効果がある。そして、自制の練習を積めば積むほど習慣となり、從つて人の人格の一部となるものである。

私は曾つて、狩をして、獅子を追ひかけて、密生してゐる荆棘の籔に、這ひ込まなければならんことがあつた。私は始終非常に恐れてゐた。併し、付いて行つたズールーの追跡者は、確かな

計畫は頗る簡單であつた。——特に獅子には

ものであつて、獅子が襲撃して來た時には、楯で私を護らうと計畫してゐた。私は獅子を恐れたが、一層ズールーの計畫を恐れた。そこで私は、その下に這ひ込み、暫く突き廻はした後に、獅子が他の方向に駈け去つたのを見て、我々は大變安心することが出來た。

その後印度で、野猪を退治したことを、又話さなければならないことになつた。我々は槍を持つて、馬に跨がつて、これを狩してゐたのだ。そして野猪をひどく手負にさせたので、藪深く逃げ込み、我々は、それを狩り出すことが出來なかつた。

人が藪を潜つて、大騒ぎをして遠い端から出て來て、野猪が居らんといつた。

處で、我々は逃げ口を番してゐたもんだから、野猪のゐることを知つてゐた。

かういふ狩りには、お安い名聲を博してゐるものだから、私は馬から下りて、追手を勵げまし二回の試みをして、中に入つて行つた。

我々は直ぐ野猪を見付けた。否野猪の方で私を見付けた。藪深い眞只中で、急に音がして、ブウ〳〵いふ聲を立て、その大獸は、かくれがを出て來て、私を襲撃したのであつた。私は槍を平に構へてゐたので、野猪が突進して來ると、いきなり、それに突き當り、その胸に深く突き込んだ。併し勢がひどかつたので、私もひつくり返つた。槍を確り持つてゐたものだから、私は野猪の牙でチョツキを裂かれないやうにすることが出來た。

これを野猪が、かなり熱心にやり、非常に巧妙に攻撃して、私を全く押し付けようとした。併し私は、槍の木口を後の地面に突き込み、之を防いだのであつた。

頑丈な追手達は、私は、殺されたことを、獵師連中に告げようと、藪を出ようとして、互に爭つたのであつた。直ぐ、槍を持つた連中は、どん〳〵やつて來て、猪に止めをさし、私は、その難からのがれることが出來た。

併し、最初我々は、こんな事は、暫く不快なことゝ思つたが、實際我々は、こんな健闘は、何やら好きになり、野猪に手負をさせると、我々は馬から下りて、徒歩でこれを攻撃しだのであつた。

聖ジョージ時代に、もつとゐたりに龍がゐたならば、立派に恐怖の念を抑へて、龍を殺す位は多分日常の餘技と思つたであらう。

然り。自分を掌中にまるめて、困難や、怖ろしく見える仕事に、敢て直面するならば、次回には、凡て何んでもないやうになるだらう。

自制は、悪い習慣を支配し得るのみならず、自分の考をも支配するやうになる。

そして、これは、自分の幸福に對する、最も重要なる點である。

最も暗い雲の後にある明るい裏を、常に見ようと心を用ゐるならば、充分な確信を以つて、暗面に對することが出來よう。

心配は、意氣消沈のためである。一度之に打ち勝つて、光明な希望を置き代へることが出來れば酒に托して、付け元氣を出したり、憂を忘れやうとする必要は決してない。

自制の修養より來る大なる恩惠は、不快なる問題を切り代へて、心行く、愉快な考を得る能力である。

心がけ次第で、悪い考の泊つてゐる頭の電池を切り代へて、善い考の入つてゐる新電池を開く習慣を修養することが出來る。

かういふ風にして、自分を別の人間にすることが出來る。

乃木將軍の自制

有名な日本の將軍、乃木大將は、曾つて私のゐた前で、どうして、自制と勇氣とを、自分で修練したかを説明したことがあつた。この自制といふのはかうであつた。將軍は、初めは神經質の弱い青年であつた。併し、將軍の意志の力は、その弱點を認めると、これに打ち勝つ決心をするといふ風であつた。

何か好きでないとか、又は怖ろしいとかいふ試練に遇ふと、それをやり通す主義で力行し、機會のあり次第、その實行を繰り返し、遂にその弱點に打ち勝つことが出來た。

將軍は遂に、恐怖の支配を脱し、その時代の最も大膽なる統率者、最も勇敢なる軍人となつた。

將軍の子息が實戦で戦死した時に、部下の間に意氣銷沈を來してはならんといふので、少しの悲みも表はさなかつた。併し誰れよりも、深く悲愁を感じたに相違ない。

天皇崩御に際し、忠誠の臣として、もはや生き長らうべきでないことを感じ、自ら割腹して殉死した。恐怖、苦痛を自制する驚くべき範例である。

自制は紳士を造る

『ロンドンの群衆は、特に作法がよい。高い建築物の屋上に、大いなる安全旗が掲げられて、何時間も立つて默つて見てゐる。

『その仕事をする人に、一言の忠告も發しないで、默つてゐるのだ。自制の偉大な例である。』

これは、ペット・リッヂが、自制に關し、又それが、如何に作法に、よい影響を與へるかを、いはなければならぬ處である。

ワイクハムのウキリヤム老は、久しい以前に『作法は人を造る。』と公言した。しかも、それは

正しい。眞人は禮儀正しい。即ち彼は、尊敬と、同情と、何ともいはれぬ愛嬌とを示す。

それは人を紳士にするが、王侯貴族も、左官屋も、紳士たることは、等しく難しとする處であるといつたのは至言である。

私は、大層バックの上手な選手がゐる組と、ボーロの競技をしつけてゐた。併し、その人には缺點があり、怒り易いので、紳士とはいはれなかつた。

そこで、一度彼に突き當つたり、ボールを打たうとしてゐる時に、ステツキを取つたりすると（兩者は、この競技で許されてゐる）怒つて了ひ、それで、その後のゲームに對しては、彼の頭は全く彼の味方に役に立たなかつた。議論や討論でも全く同樣だ。若しも相手が怒りつぽいならば、相手は手中のものだ——但自分では怒らぬことだ。

新聞紙に、苛い通信が見えることが往々ある。大抵は小心の人で、怒りつぽい人は『新聞に出して』攻擊するのである。こんな人は子供らしいので『私はもうあなたの庭では遊びやしない。行つて、お母さんに告げるよ』といふやうなものだ。

これを記憶なさい。『自分が正しかつたら、怒るには及ばぬ。自分が惡かつたら、怒つてもしよ

うがない。」

この流儀で前進するのだ。――禮儀と自制とを紳士らしく振舞ふのだ。さうすると、相手がこの性格を缺いてゐると、何時でも勝利が得られる。

忠　　實

人格涵養(それは飲酒に對する最も善い解毒劑だ)に役立つ他の點は、他人に忠實であるといふこと丶、特に自分に一層忠實であることである。

米國の老練な餓鬼大將のダン・ベアードは、『鹿皮人』の規定を設けた。即ち、人がどんな危險にも赴き得るやうな、絶對に信頼し得べき人。勇氣、工夫、何よりも忠實な人といふ掟である。

忠實は、人格にあらはな點である。アーネスト・シャックルトン卿は、クエスト號で、最後の航海に就く前に、チルドレンス・ニュースペーパーのアーサー・ミーに、曾つてかういふことを話したことがある。南極で、萬事究して飢餓が徐々に迫つて、死より外はないやうに見えた時に、シヤックルトンは、彼の部下が二人で次のやうに話してゐるのを、圖らず聞いたことだが

『我々はやり通せるとは思はれん。』と一人が云つた。

『それは、大將の用意次第だ。』といふ返事。

それは、新たに我に歸らしめ、統率者の責任のみならず、その孤獨の悲哀を感じた。

彼のいふのに『統率は立派なことである。併しそれには罰がある。その最も大なる罰は孤獨の悲哀である。』

『部下には、凡てを告げるものではないといふことを感ずる。』

シヤックルトンのいふのに『事實ばかりでなく、事實に關する感想をも、かくさなければならぬことは屢々ある。事實は怖ろしく、意とたがうても、さういふべきものではないといふことが解るだらう。南極統率を可能ならしむる唯一の事がある。それは忠實である。部下の忠實は汝の負ふ最も神聖な信頼である。それを決して裏切してはならぬものであり、これを遵行しなければならぬものである。』

『彼等の勇氣、彼等の元氣は、如何なる言葉でも盡すことが出來ない。どんな困難にも屈せぬ元氣、喜んで忍耐する心。渴の苦しみにも唄つたり、笑つたりして、これを我慢すること、何箇月

も死地を踏んで、決して悲しまぬこと、――勇氣を起させるのはその精神である。私は、私の部下を愛した。』

私一個としては、その方面では、少しく小さい試練ではあるが、永續した危險や、兵士の困難を包含したメーフキングの經驗から、シャックルトンの一字一句を充分是認することが出來る。

兵士の元氣な全幅の忠實の同樣な實行は、シャックルトンのと同樣、我々の成功の祕訣であつた。同樣に忠實は、事業であつても、國家の擁護であつても、如何なる困難にも成功する祕訣であらう。

忠實は最も貴重な性格である。眞に名を重んずる人は、危急存亡の間に、修養されるもので、堅固に保持されるものである。

同時に、シャックルトンの最も重んじて實行した處であるが、特に指摘しないものが、忠實に含まれてゐる。それは『孤獨の悲哀』に大に附加するもので、統率者の重き責任に加へるものである。

統率者は、部下の忠實を要するが、等しく部下に對しても忠實を表さなければならぬ。それは

スカウト掟に强調してゐる處である。即ち『スカウトはその雇主に忠實であり、部下に對しても忠實である。』

この方面の忠實は、シャックルトンが、苦境を部下に隱すことを注意したやうに、或る方法で部下を欺く時に、統率者を難局に置くことが屢々ある。私も亦それを知つてゐることだ。

それから又、統率者は、その任務の爲めに、忠實でなければならぬ。そこは、統率者の義務の最も困難とする所である。

例へば、戰場に臨んでゐる將軍の帶んでゐる大責任を人は知らん處であるが、部下に對しては全く忠實である。部下の生命は、今日にも計られないものであるが、その戰爭の結果は、將來とり返へしもつかぬといふ事實を考慮しなければならぬことである。それ故に、より大なる考慮即ち國民の安寧、幸福の爲めに、その愛し信頼されてゐる部下の生命を賭してしなければならぬことである。

是等のことは、忠實は如何なることかを考へ、統率者として如何に自分を修養すべきかを考へる時に、思ひ及ばなければならぬことである。

併し、自分に對する忠實もある。誘惑が起ると、良心は『否』といひ、迷は『然り』といふ。そのいづれに從ふかによつて、一身の浮沈がかゝつてゐる。自分が自分に忠實であるならば、上に進む。それを恐れて負けると、下に降り、自分の聲價を下げる。

誠　實

或時、間者を見付けたり、吟味することは、私の任務であつた。勿論嫌疑者の國籍を見出すことは、極普通なことである。そして追跡して行つて、どんな國語を話すか聞くのである。併し、外國の間者捕りが、私にかういつたことがある。英國の將校らしい者が、變裝してゐると感じたら、一つの誤らない試問がある。さういふ時は、これと會話をして、彼をうそつきだといふ第一の機會を捕へる。その將校は、一應その眞を隱すのに、隨分巧みであつても、彼をうそつきといふと、その侮辱に嚇となつて、ばけが現はれる。

なるほど、その通りである。『うそつき』といふ語は、名譽ある者に對しては、刺されるやうなものだ。何か普通の問題を論議する時に、『君はうそつきだ』と、少年や大人が、無考にいつて

ゐるのを聞くのが嫌である。

屢々それを聞いて、私は世人がそれに慣れてゐると思ふが、名譽ある人は、決して、それに慣れることが出來ん。その人には、いつでも、最も惡い侮辱である。

自　重

自重は、人格構成の重要分子である。自重の出來ない者は。(しかも大酒家や、なまけ者や、うそつきや、乞食にはこれが出來ない。)他人に自分を尊敬させることを豫期することが出來ない。

あり勝ちな小さい缺點、即ち心附の入つてくるのは此處である。スカウトは丁寧と好意から、他人に善行をなすことを豫期され、謝儀を受けることを豫期されてゐない。心附を受ける者は、自分を卑下し、なさけを受ける乞食のレベルに自分を置くものである。

私は近年、自動車運轉手や、ホテルの擔夫、給仕や、その他、華客から少しの金を貰ひたがつてゐる者は、心附が、忍び込むのを見ると、非常にかなしむものであつた。

そして、男として、心附けされたり、なさけを受けるといふことは、恥づべきである。心附は、

よい金になる處では、所謂『祝儀』の方に陷れ、これがもつと進むと賄賂、腐敗に陷るものである。

從來我國人は、非常に男らしく、自重心に富んでゐる爲めに、これまで身を下すには至らなかつた。長く『英人には賄賂がつかはれない』といはれるやうにしたいものだ。

サムラヒは、千五百年前からの、日本武士の兄弟で、我々の中世武士と頗る似たものである。彼等の主眼とする理想は、武士道であつて、その間に次のことを奬勵してゐる。

富の代りに貧
誇張の代りに謙遜
出しやるの代りに控目
我儘の代りに沒我
各自の利益の代りに國家の利益

之れに配するに勇氣、我慢、忠誠、自制、純潔を以つてしてゐる。

若しも、武士が、己を辱かしめると、ハラキリを仰せ付けられた。これは滿座の前で、嚴格な

儀式に從つて、割腹して、自殺することである。是等の武士は、その名譽、威嚴といふ問題に關しては、非常に敏感であつた。權五郎といふ者は、戰の最中に眼に一矢を受けた。彼は、これに屈せず、戰が終るまで、戰を繼續し、部下を指揮したのであつた。一人の友人は、その矢を拔いてやらうとして、彼を仰向にねかし、普通に引く位では何にもならぬので、槓杆作用で、之を取らうとして、權五郎の額に、足を上げた。遂に槓杆法でうまく、之を引き拔いた時に、權五郎は、禮をいふ處か、立ち上がつて、足を頭に加へた不禮を怒り、友人を切らんとした。

不面目は人を、漂浪者にさせる

この世で、何が最も悲劇か御存じですか。それは、辱かしがる人を見ることである。之を見るさへ氣の毒に感ずる。

數年前、ほんの數分間で、之を見たのだが、今だに心につきまどうてゐる。

海外領土の、遠く離れた地點の藪地で、私は鐵道の延長線で旅行してゐた。列車が、或る地點に停ると、白人の工夫長と、その人夫が働いてゐた。たつた數分間でも、外界の最近報道を得た

り、他の白人と話をしようとして、列車を見ると、大喜びで、大抵は寄つて來るものだが、この工夫長は、側に退き、我々に背を向けて、列車と、乘つてゐる白人が、再び出でゝ行くのを待つてゐるばかりであつた。

私は彼のことを聞いて見ると、前には騎兵將校で、ロンドンでも、よく聞えた人で、愉快なスポーツマンで、評判な者であつたことを知つた。

併し、酒に溺れたので、段々身を持ちくずし、零落して、今見てゐる通り、漂浪者となり、不面目な者となつてゐたのであつた。

若い者は進むことばかり知つて、氣轉がきかぬ

『若い者は進むことばかり知つて、氣轉がきかぬ。』とは、誰れかが、若者の或者にいふ處である。それは、私が、南阿で、第七騾騎兵の一隊を率ゐて、偵察に出かけ、乾いた河床を渉つた時に、獅子に出つくはした場合のことを思ひ出させる。

我々の一人は、これに發射して、非常な病手を負はせたが、獅子が、葦芦の深い叢に逃げ込んで、その中に追跡するのは不可能であり、然らざるも非常に不安であつた。然るに獅子はかくれるのに、あらゆる利便を有し、誰れか、隱れがに近か寄るときは、これを聞きつけたり、かぎ付けたりする優勢な地位を占めてゐた。

そこで、獅子が出て來たら、報告を與へるやうに、直ちに隱蔽地の周圍の各所に、部下を配置した。我々の計畫は、用意が全く出來て、銃を持つた兵が、適當な場所に配置されたら、草に火を放つて、獅子を狩り出すことであつた。

これには、風上の芦は、青くて火がつかなかつたものだから、隨分時間が經つた。

私は、その方面に、獅子が出て來はしまいかと思つて、岩の上に、見張りをするのによい場所を占めてゐて、芦の間に、これを見のがすまいと、眼をみはつてゐた。芦が動くのが見えた。そして、それがあちこちに動くものだから、動物が私の方面にやつて來るのが判つた。

私の心臟は、興奮して動悸がする。私は一功名をしてやらうと、實彈を詰め、獅子の鼻先でも見えたら、目に物見せてやらうと、銃の撃鐵を、充分上げて、待ち構へてゐた。

だん〳〵近かよつて來て、私から數碼に迫つて來た。私はしめたと思つた。私はその方面に目

若い者は進むことばかり知つて氣轉がきかぬ。

をはなさなかつた。

芦が開けた。私は發砲しようとすると、獅子ではなくて、馬掛の兵曹が、私の前に現はれた。

兵曹の任務の一つは、馬が重傷を負ふたら、苦痛を去るために、拳銃でやつつけることであつた。そこで、この者が、獅子が痛手を負ふたものだから、入つて行つて、止めを刺すのも、自分の任務と思つたのであつた。

兵曹は、その拳銃は、豆鐵砲位の役にしかたゝぬことも考へ

なかつた。又獅子をやつつける處か、兵曹がやつつけられることも考へなかつたのだ。實際兵曹は、あぶなく私にやつつけられる處であつた。併し、彼は獅子の道には、青二才であつた。號角など鳴らしてゐるのに、獅子は出てくるものではなかつた。彼は立派な突進を示したが、氣轉はきかなかつた。これが、何の準備もなく、警戒もなく、多くの若い者が、生きた獅子にもかゝる仕方である。

自己暗示

自制又は克己といふことは、今は科學的研究となつて來た。その最近の代表者たるコーエ博士は、心靈の術によつて、苦痛、疾病を治療する驚くべき記錄を發表した。

各方面から、患者が自ら、罪障を脱し得ると信ずることによつて、『心靈治療』の功果によつて、注意すべき治療のことを聞いたことがあるだらう。

我々の大抵の者は、時々は或る程度までは、自分で、これをやつてゐるのであらうと思ふ。例へば脚部に負傷したとする。脚部全部に亘つて痛む。氣絶しさうにも思ふ。地面に足も立てら

れない。オ、痛い。

坐つて、暫くねて、瞑らして置く。

處で、これを扱ふ、他の方法がある。

怪我したのか。さうだ、ほんの小さい穴だ。痛いのは傷の圍だけだ。イエ、脚の上までと思ふのは氣のせいだ。イエ、それは、ほんの小さい部分で、極小さい處だ。だから、痛みも少しだ。しつかりしなさい。歩いて、硬くならないやうに、脚を動かしなさい。溫罨法でもすると痛みません。それだけです。もうよほどよいでせう。』

コーエ博士の考は、自分で、自分の懊惱を治療することであつて、それが何であらうとも、自分の意志よりも、自分の想像を用ゐるを要する。

博士は、その違を、かく説明してゐる。地面に、普通の板を置くと、何の不安もなく、その上を歩くことが出來る。

同じ板で、往來から百呎高い、兩建築物の頂上に、橋を架けると、之を渡ることが出來ぬ。

意志は、向側に渡るために、進まうとする。想像は、自分が墜落するだらうと考へさせる。そ

して、自分の意志に勝つ。これは、兩者の普通の關係である。そして、想像は勝利を得てゐる。

そこで、何か苦惱があつたら、思想を集中して、希望する治療を想像し、そして、段々にこれを達してゐると想像すると、直ちにこれを達することが判る。

百人中九十九人は、自分がさう信ずるから、苦痛を感じ、病氣にもなり、無援にも思ふ。それは、想像である。併し、その想像の逆を用ゐて、段々によくなつて、遂にはよいと想像することが出來るならば、それは、殆んど大抵の場合によくなる。

コーエ博士は、毎日とぼ〳〵とやつて來る患者の群衆は、喜んで歸つて行く結果を得てゐるので、その理論の眞實なることを證明してゐる。

而して、博士は、金や報酬のために、それをしてゐない。

併し、その大切なことは、自己暗示は、病氣や、苦痛を治療することが出來るのみならず、記憶の惡いのや、神經質の恐怖を治療することが出來、特に、——これは、青年に大切なことであるが——酒や煙草、性慾や他の物慾を一掃することが出來る。

如何にしてトミー・トムキンスは死に勝つたか

印度で、怖ろしい神罰としてゐるコレラが、聯隊に起つた。私の中隊の頑丈な老兵士のトミー・トムキンスは、それで倒れた。ほんの二三時間、具合が悪かつたやうであつた。

『可哀想に、トミーもやられた。』とは、軍醫の診斷であつた。

けれども、四十八時間、彼は、生死の間に保つてゐた。そして、遂に、皆の驚いたことには、彼は病氣の峠を越えた。

後になつて、私は、彼を保養療院に訪問した時に、彼は、死に勝つた祕訣を、私に談つた。醫者が、あんなにもいつたものだから、もう死ぬものだと思つてゐた。併し、看護の土人が、四肢を溫めさへすれば、生きる望みがあるといつたのであつた。そこで、直ちに、熱い瓶や、煉瓦を足下に置くことにした。

醫者は去つて了つた。看護人は、熱い瓶の面倒も見ず、押し入れから、水煙管を取り出して、隅に蹲つて、靜かに煙草を吸つてゐた。

これは、動きも、話しを出來ないが、何んでも解つてゐるものだから、トミーを非常に怒らせた。再び全快しさへしたら、容易に忘れぬ程、土人をやつつけてやらうと決心した。どんな形式で、罰を科してやらうか、どの位たつたら、床から出られて、これを處置してやらうかと、その事ばかり考へぬいてゐた。そして、死ぬ考などは、そつちのけにして、その者を叱つてやることばかりに考へ耽つてゐた。

そこで、こんなことをして、再び生きられるやうになつた。

死を免かれたのは、意志と想像の力であつた。

私は、自分でも、丁度こんな經驗をもつてゐる。私は赤痢で入病して、かなり惡いことがあつた。その時に、或日限までに、全快しさへしたら、敵を追擊する一隊の指揮をせよといふ命令を受けた。

それは、無理とは思つたが、何んとか、さうしたいといふ希望を抱いてゐた。そこで、私は、その指揮に當つたら、どうしようかといふ想像をし、計畫なども立て、同時に、全快のことばかり考へてゐた。

療養を努めれば、努めるほど、段々よくなつた。一日一日と過ぎて、私は靜養期になつた。併し、その多事の時となつた時に、出かけるのに、少しく不充分であつた。

二日たつと、また一人が入院して、これも亦赤痢で重態であつた。私の病室は、その爲めに入用であつた。私は、彼に之を讓り渡した時に、死ぬに入院したやうなものだと歎息してゐた。私は『馬鹿な事をおつしやい。私が入院した時は、もつと惡かつたのです。再び退院したら何をするか考へてごらんなさい。』

翌日私は、三人の護衛をつれて出かけた。八十哩も危險な地方を通つて騎行した後に、その縱列に追ひ付き、その指揮の任に當つた。

然るに、私と入れ代つた患者は、自分で死ぬものと思つてゐた。その患者は段々惡くなつて、明かに、自分の思つた通りになつて——死んで了つた。

自己療法

處で、これは、自己暗示の實際の術である。それで、決心しさへすれば、人が多くの病氣も、

殆んど大抵の弱點も、自分で治すことが出來る。

若し人が自己療法によつて、死に勝つことが出來るならば、確かに、飲酒及其他の誘惑に勝つことが出來る。これを忘れてはならん。物事は、何時か、自分にとつて困難に見えたり、不可能に思はれたりしたならば、成功に達する方法を考へ、それから、之を成就する方法を計畫する。そして、自分の心が、不可能だといふ時には、これに對して答へるのだ『イヤ。不可能ではない。どんなものか、やつて見よう。私は、やつて見ることが出來る。私は、成就することが出來る。私は出來る。私は出來るから——私はする』さうすると、十中の九は成功する。

放縱は、自己の感覺的慾望に、自分の注意を集中するから起るものだ。その療法は、自分の興味を、自己から、他物、他人に轉ずることである。何か道樂をもつて、他人に對する活動的同情、援助に入つて行くと、直ちに、自分の人格涵養の新方面が得られる。

エーミエルがいふのに『自己にかくれる人は……少しも個性の本體は得られぬ。彼は群衆の一人だ、納稅者だ、選擧人だ、併し一人前の男ではない。彼は、流れに浮ぶうたかただ、無理想だ、無確信だ。かゝる者は世界の道具の一片だ——生命のある動く物でなく、動かされる物だ。』

現像し過ぎた人格は、解放された自己である。それは、我々の欲するものとは、全く反對なものである。人格を有する個性は、別物であつて、節制、勢力、能力、義俠、忠實、及善人たる他の性格を有する人のことである。是等の性格は、社會の奉仕に連結すると、善良なる人以上のもので、善良なる公民となるのである。

格言

自尊にあらざる自重は、他人から尊敬を受ける。

人格は、この世の如何なる資格よりも貴重なるものである。

克己は、人格の三部分である。

『食間』に飲酒するな。

人格は夢想することは出來ぬ。自ら之を鍛錬しなければならぬ。(フラウド)

ツグミに學べ。『ステイック・ツー・イット。(とりすがれ)ステイック・ツー・イット。ステイック・ツー・イット。』といつてゐる。

我が子よ。郵便切手のことを考へよ。その有用なことは、目的地に達するまで、一つの物に着いてゐる能力を有するからだ。(ジョン・ビリングス)

物事が歪んだとき
　そして怒りたいと思ふとき
不平をいふな、騒ぐな、惱むなよ、
　暫くは——ほゝえんでゐろ。

誰かが、おまへを『べてん』にかけるとき
　半分以上もとつて
我慢せよ、しつかりして、心地よく
　暫くは——笑つてゐろ。

併しむつつりしたやうなときは
（勿論、時々はあることだ）
すると、えみも浮かばず、笑顔も笑ひもされぬ
暫くは――じつとしゐろ。

誘惑を一掃せよ

酒が『私は、あたの友人です。』と呼びかけたら
それをふりきつて了へ
『あなたは、つよいですね。』と酒がいつたら
それをふりきつて了へ。
ころんだり、ろれつがまわらぬ前に
溝になげられる前に
パンやバタを失ふ前に

それをふりきつて了へ。
誘惑が來て『如何ですか。』といつたら
それをふりきつて了へ。
それは『あなたは何處にゐたんですか。』といつたら
それをふりきつて了へ。
どんなに、やさしく、あまい言葉をつかつても
それは怖ろしい力があるものだ
それは惡魔の人とりだ
それをふりきつて了へ。（バレンタインの『老主人』）

參考書

The Practice of Auto-Suggestion. By C. H. Brook (Allen, Unwin 2s. 6d.

第三　暗礁

女

女

この暗礁の暗黒面は、婦人に對する敬意を忘れる誘惑である。
光明面は、義俠及男子の保護力を增進して、自己の誘惑に陷ることを護衛することである。
性慾とその危險。
青年期は、人生の『思春期』で、それは動植物なら年々起るものである。
成年期に近付くに從つて、青年に性慾の誘惑が起る。れそは全く自然の理から起るので、即ち精液或は液汁を組織に傳播することである。
男女兩性の種子は、結合して新生兒の胚種を形成する。
この種子は、種族を維持するために傳はつた神聖な委托である。
注意、節操の重要なこと、即ち誘惑に陷らぬこと。
誘惑は、傍若無人の風をなす青年に交り、互に不注意な談話をなす間に增進する。
誘惑に降服すれば、男は自重を失ふ。

彼は又花柳病に罹り、危險と返報とを受ける。
病毒は無智の結果で、多くの悲劇を來す。
雄々しさ。
婦人に對する義俠心は、男子をして、女色に耽り又は、婦人を誘惑することなからしめる。
克己復禮は各自の務めである。
母性の感化は汝を助ける。
自己を護りて、種族を維持することが出來る。
健康及勢力の增進法。新鮮な空氣、淸潔、深呼吸、齒の注意、運動等。
男子になれ。
結婚。
戀愛を高潔ならしめよ。
良妻の撰擇法。
婚約に關する豚肉屋の警告。

收入の重要な細目。
男子は、結婚すると、その妻に對し義務を負ふ。
子孫を得る樂しみ。
父母の責任及子女の教養。
家庭の幸福は、社會奉仕によつて完成される。

この問題に關する言說一束

參考書

女

この危險は、婦人に對する敬意を忘れる誘惑である。
その光明面は、義俠及男子の保護力を增進することである。

性慾とその危險

峽谷の王侯

原野又は森林に住む動物で、生の高潮に達した、成熟期に牡鹿を見るのが、最も立派な光景の一つである。彼は獸群の王で、——ランドシーアの描いた如く、峽谷の王侯である。
我れと思はんものは「來れ」と、戰を挑んで、立つてゐる有樣は、勇氣、勢力、男性美の標本である。
秋の「交尾」期になると、見るも勇ましいのは、牡鹿が牝鹿を占領しようと、互に號叫し、戰鬪をすることである。

妻妾を撰擇する。

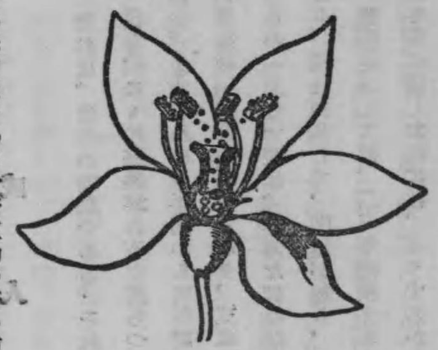
かくて彼は責任を帶びて、何時でも、凡ての侵略者に對して、牝鹿や子鹿を保護する用意をし——又これが出來るのである。

朔　春　思

筆アーシランド、侯王の谷峽

彼等は、暫くは頭もなくなつたやうに見える。其處此處と駈けたり、落付きもなく、氣を揉んで、何週間も不眠不食。遂には全く疲れきつて了ふ。その時絶頂に達する勢力を、最もよく蓄へてゐる者の番になつてくる。續いて來る戰鬪に於いて、角の擊突、鬪者の奮鬪の叫び、弱者は降參して、强力な競爭者に壓迫されて後退し、遂には敗者は逃走し、勝者は、獸群の主となつて

敗軍の弱卒は、その時分になると、追放者の群に交つて、何か樂しみを求めて忍び歩く。さかりに疲れ過ぎた貧弱な者は、强大な勢力と活動力とを有する立派な動物を貴ぶ追跡者には、多く考へられて居らぬ。



雌蕊の中央部（雌）
（擴大圖及斷面）雄蕊より子房に落つる花粉を示す。即ち雌蕊の卵巢は胚種を含む。これ等は花粉によつて成熟する。

同樣な事は、程度に大小の差があるが、草原の動物、春の鳥、冬の魚の間に於いてさへも行はれてゐる。

樹木、草本の植物でさへも、自然の理法の支配を受けてゐる。そして、春のさかりの時代になると、樹液が上つて來て、自然に枝、葉、卷鬚に及び、そして花が咲き雌蕊の子房は、雄蕊の花粉を受けて、胚種は、小さい花粉と結合しその共同によつて、新植物の若い種子が出來るのである。

植物が春期に美しい花を開くことさへも、禽獸が交尾期に、最もきらびやかな毛色をする習慣

と同樣である。これが又若い色男連中の間に、時色の靴下をはき、はなやかな襟飾をし、髮毛に油を付けるのを見るやうなものである。

成人

それは、自然の衝動である。それ故に人間にも亦起る。

併し、こゝに差異がある。落ちつきがないやうになるが、それは毎年ではなく、生涯に一度である。――それは少年期から成年期に移る時である。そして牡鹿に於けるが如く、或場合には强い男性の『獸群の王』となり、或は下落すると弱虫になり、或は追放者にもなる。

この『思春』期は、非常な轉換期である。それで、或る者には多大な警戒を要し、或は沈鬱になり、或は興奮して、困難が起り、これが數ヶ月も續くことが屢々ある。

實際時としては、二三年繼續することもある。私は青年から手紙を澤山もらつてゐる。彼等は成年期に達した時には、どうするかを敎へられたこともなく、從つて彼等の轉換期を知つて、懊惱を感じたのであつた。彼等は、その理由も知らずに、神經質になつたり、心の不安を感じたり

したのであつた。彼等は仕事に落付くことが出來なかつた。彼等は他人に對して臆病になつたり悲觀したりし、屢々頭がぼつとなつたやうに感ずる。

彼等の困難してゐるときに、私に手紙をださうと考へたことは、私の非常に喜びとする處である。なぜなれば、私は大抵の場合に、彼等を安心させることが出來、平靜に之に當ることが出來るやうにしてやり、癲癇や、その他の青年の惱みを、とり越したやうに、之を經過せしめることが出來たからである。さうすると、轉換期といつても、何のことがないのである。凡て全く自然の理から來るのである。

心を研究する心理學者及文士は、心と關係あるものとして、その理由を述べる。併し、又肉體と關係するといふ、充分明瞭な理由のあることも、我々の大抵の者が認めてゐる處である。

少年が成年期に達する時は、全身に亘つて、徐々な變化が起つて來ることは、誰でも自己で氣が付く。聲が太くなり、以前には、生えない處に、毛が生えたり、筋肉が、確りして丈夫になり各種の機關が發達する等である。

性慾は全く自然の理即ち液汁から起る

この變化は、體内に出來る處の液汁から起り、少年期以上になつて成熟し、樹液の木に於けるが如く、現に體内に擴つてゐるのである。それが、その組織に、男性の元氣を與へ、そして氣力を作り、勇氣と起す。それから、それ以上の、特別な作用を起す。

それは種子を稱するもので、ラテン語の種といふことである。それが、この液體の中にあつて生殖機關に行くと、多數の胚種即ち種が發達するのである。

新生兒を作る胚種の作用

是等の種の効用は、同樣に、女性に所持される種子の間に混合して、受胎するといふのは、二個の種子が合同し、そして、この二個の合同によつて、生長して、もつと大きい胚種、即ち小さい卵になり、段々形が出來て、生命を得、遂には、奇蹟が實現して、子供となつて、表はれるのである。

胎受 G. 雌にある胚種で、雄により受胎したもの。Y. 卵黄形成す。B. カラザ即ち薄い卵白の吊帶。A. 氣室

三週間後の孵化せんとする處、嘴、爪、羽毛、目等あり。

卵の奇蹟

雌鷄が、日々卵を生むのは、丁度これと同樣の奇蹟である。その卵は卵黄を含み、卵白は將來の生きた雛になる。それは、雄鷄の種子が、雌鷄のと合同した結果である。

人體に於いても、これと同樣に、胚種の結合によつて、肉と血と骨とよりなる生きて、呼吸する生物となり、視力もあれば、腦も心もあり、多くの點に於いて、外形も性格も、兩親と類似のものになる。

胚種は、種の維持の爲めに神聖な委托である

この若い生物は、再び胚種を繼續して、成熟期の年輩に達すると、この交替に、將來の子供を生育せしめるのである。

この全部が奇蹟であり、造物主たる神の功業である。君を造つた胚種は、君の父から傳つたものので、而かも、その先代の胚種から傳つたものである。かくの如くして、暗黒時代に遡るのである。

故に君にある胚種は、時が來たならば、君の妻と共に之を子孫に傳へなければならぬ。

かくて、それは、君の父、その又先代の造物主――凡ての大祖父から傳つた、神聖なる委托である。

時としては、この精液の形成が早過ぎると、睡眠中に夢をみて、それが洩れることを發見する。これは驚くには及ばない。自然の溢流である。併し、自分で、その流出を試みてはならぬ。それは過勞となり、君の組織を排出することになる。

機關を清潔にし、毎日冷水浴をするのは、最も善い豫防法である。

誘惑

青年は物のわかりがよい。そして、忠告を受けさへすれば、好んで之を守る。そこで、私が前

に述べたことが、よく解つたならば、内に發生する男性の元氣を保持するために、確かに彼等は最善を盡すであらう。併し、多くの者が、少しも警告を受けたことがない。又何がどうなるか、何が興奮させるのか、少しも聞いたことがない。それで、誘惑の赴く處、誘ふ婦人に、これを洩すか、恥しいことではあるが、屢々『手淫』を行ふのである。

そして、誘惑に陥ると、種々の方面に於いて、非常に悪いのである。第一には、自重心をだいなしにし。親にも姉妹にも、言ひ得ないことをしてゐるのである。恥かしいことである。下品なことで、男らしくないことである。恥づべきことをする者は、もはや男ではない。知りながら卑劣者になるのである。

又それは、精液が、丈夫な男らしい男を造る唯一の途である處の、充分な機會を得ることを妨げる。又自分に傳つた種子を放棄するもので、之を維持し、後に子孫を得る成熟をまたずに、折角の委托を蔑にするものである。

その普通の結果として、男らしい健康、智能の高潮に達すべき時、その大事な時分に、自分の健康と腦との力を消失させる。

傍若無人の風をする群

思春期の青年が相集り、淫猥な話をし、猥褻な繪を見るなどのことは、有がちなことである。そして、實際は無知の危險が付きまどつてゐるのに、こんなことを話して、大層得意になつたり、男らしいと思つてゐる。

彼等は一般に、悪い種類の考が頭に入つて、考へたり話したりしてゐる中に、慾望が起つて來る。これが屢々人格の劣弱な者に見る處で、これを征服することも出來ないでゐる。

普通の經過では、思春期は、數週間又は數ヶ月で通過する。併し、誘惑の赴くまゝにしたり、その考を話したり、だらしのない者と一緒になつてゐると、多くの者は、婦人と不義をなし、自分で手淫をする習慣に陷る。そして思春期が經過した後にも、生長して成人なつた時にも繼續する。

一度この習慣がつくと、これを廢止することは頗る困難である。併し、その決心をなし――この事に當り、之が制止に力めると、仕了ふせることが出來る。成功するたび毎に、益々成功を確實にする。

日曜日は、罪悪には、一週間中で、最も悪い日である。なぜなれば、青年は爲すべきことがなく、無聊のぶらつきは、だらしない話をさせるやうになる。然るに遍路（最後の章を見よ）を實行するならば、行脚をしても、屋外の娯樂にも、男性的の活動にも、爲すべきことは澤山にある。悪を除く爲めには、これに代る善い物がなければならぬ。

花柳病

若い者の間にある、だらしない話から起る、殆んど定まつてゐる結果は、淫猥な話に落ちることである。そして、かういふ風にして、理想及思想は獣的標準に下落する。そして、生長して成人になつた時に、後になつて恥づべき者になることである。

それは、幸福への途上に登つて、背を向けることになる。なぜなれば、逆境を脱しようと努力して、餘り深く泥の中に、踏み入つたからである。そして、その泥は、常に或る程度までくつついてゐる。

それから、若い者は、花柳病を、無頓着に愚弄する。それで、きつと、馬鹿に性慾に耽つた者

に、早晩病魔が襲ふ。

處が、是等の病魔は戯談ごとではない。最初これに罹つた時は、どんなに輕微でも、人には非常に危險なものである。

彼等は、直ぐに罹り易い。――病毒のある人のコップを用ゐて飲んでも、接吻をしてさへも。花柳病の主なるものに二種ある。

黴毒

患者の用ゐたコップ、煙管等に觸れても、傳染する病毒である。この病氣は、痛みを感ずる。これが、數週間經つと、他の痛みを來すやうになる。それから、一年から二十年經過する中に、身體や、骨の或る部分に病毒が及び、心臓を犯すことも屢々ある。

淋病

接觸によつて感染し、又は患者の手拭等から傳染する。これは、生殖排泄物及生殖機の炎症によつて解る。炎症增進すれば、膀胱等に及びがちである。

黴毒は、病毒を有する兩親から、子供に遺傳することは屢々ある。その結果として、盲、聾、

麻痺性や精神病を生ずる。幼少から、盲である人の廿五パーセントは、兩親の黴毒の結果であることを、統計が示してゐる。父親の罪惡は、實際その子供に來るのである。

一度黴毒に罹ると、廣告に出てゐる賣藥位では治らない。唯一の方法は、直ちに良醫の診察を受けて、有りのまゝを、率直に話すことである。手遲れしないならば治療が出來よう。

併し、その危險は、ふざけてゐるやうなものではなく、罰は覿面だ。さうではないか。どこの花柳病々院を訪問しても、かゝる花柳病の實例が、言葉でいふよりも、よく説明をし、肉體及精神を救ひようと思ふならば、遊女町の女に、戯れることを避くべきものだといふことが解る。

かういふことも注意しなければならぬ。一度感染した男は、表面は治つたやうでも、病毒菌は何年も殘つてゐがちであるから、後になつて、妻や子供に傳染する。そして、これが結婚の上に自分の故から罪惡を作り、自分の馬鹿から、無垢の生活を破壞することになる。

かゝる危險を犯す馬鹿は、多く、劣弱な群に誘はれる結果である。

それは、飲酒や賭博と等しく、――思慮もなく、他の無分別な若い者と仲間になつて、餘り深入りするから、病毒にかゝるのである。